都林泉名勝圖會　四

都林泉名勝圖會巻之四

目録

衣笠御霊
鷲峯
三笑橋
西源院林泉 衣掛山
綾杉
花園社
妙心寺
法堂
四派松
古鐘黄鐘調
什寶五千体
玉鳳院 東君堂
微笑菴 臥水泉

龍安寺
三島
方丈林泉虎子渡し
東皐院
真田幸村塔
花園山亭
山門
天井蟠龍
雪江松
十景
黄金鐙
花園法皇宸影
開山國師像

鏡容池
水打石
八景
大珠院
同寄附寶器
頓阿法師古蹟
佛殿
毘盧藏
鐘銘
方丈畫
矢根寶劍
拈華室
祥雲院殿魂舎

織田家塔
天授院
古鏡
授翁真筆
記文
如是院
東海菴
大通院 虎石 硯石
海福院
麟祥院 宇天神
芋喰僧都舊蹟
南浦畧傳
一休詩

武田家塔
什寶
古錢
藤房卿髪塚
退藏院
衡梅院
靈雲院
蟠桃院
桂春院
春浦院 福富
大應國師塔
虚堂贊
後宇多院塔

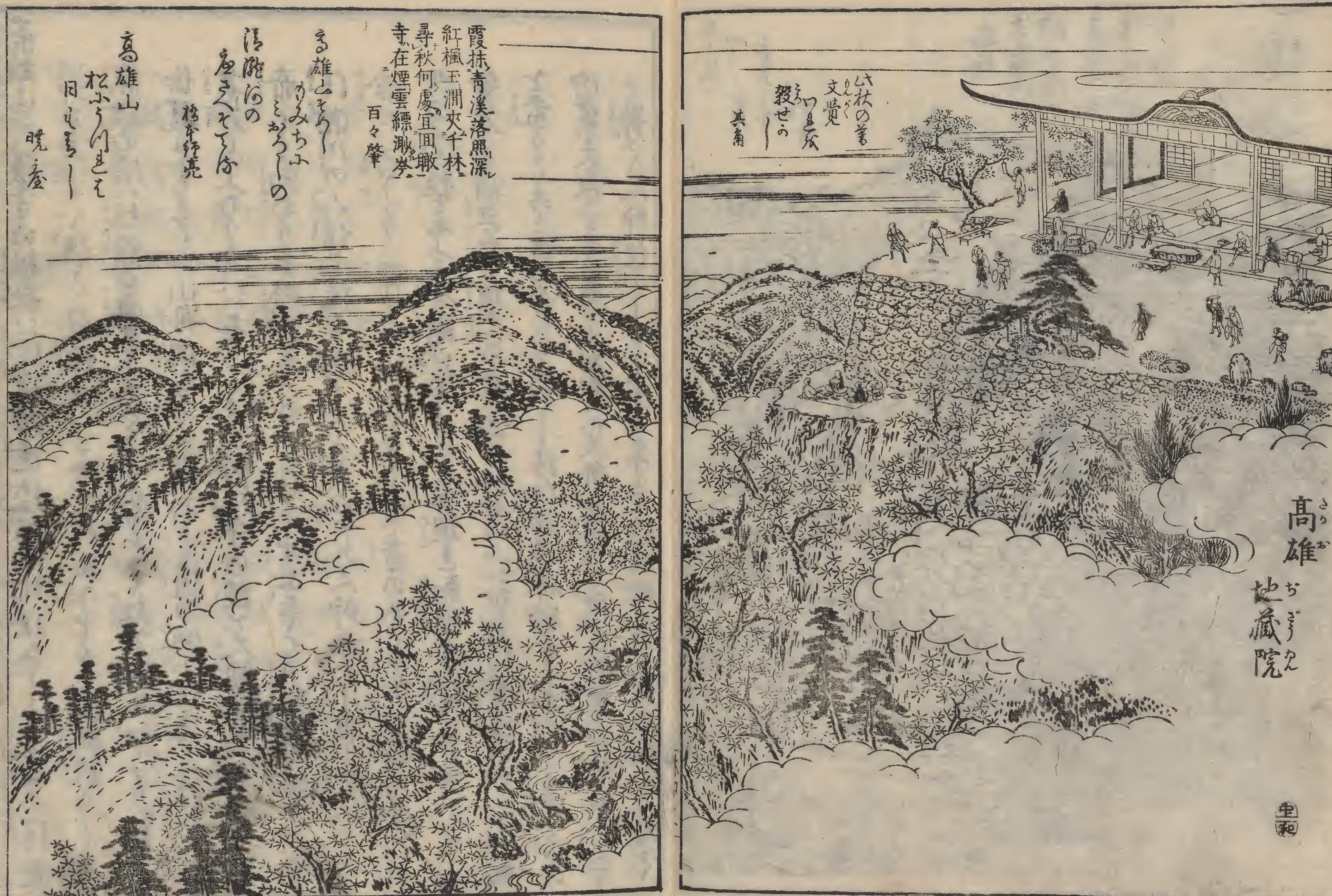
龍馬獻上
寶塔
經文切
碑石
養源院
龍泉菴
聖澤院
雜華院
大嶺院
大光院
安井邑龍翔寺古蹟
大應頌
賀陽門院塔



都林泉名勝圖會巻之四目録 終


高雄
桐園 維明
谷の流れ
浪花 文譜
女人禁制


高雄看丹楓
滿眼秋光画不同
風霜昨夜染山楓
已如霞彩凝林表
又似暾暉掛樹中
鳥怯投棲疑火燎
蝶飛不去訝花紅
賞遊盡日耽詩句
揮筆還羞錦繡工
橘山畑柳啟
天鳴



高雄地藏院
其角
霞抹青溪落照深
紅楓玉澗夾千林
尋秋何處宜回瞰
寺在煙雲縹渺岑
百々肇
高雄山
曉臺

高雄山神護寺の林泉ハ洛北の妙境他邦に比類なし寺前に清瀧川ゆるやかに流れて飛橋かゝつて渡す川岸より楓林にして高深秋の頃ハ紅錦を曝せるがごとく人の面までも紅を彩るに似たりけり伽藍に至るまで一山丹楓ならぬ所なし道の側に弘法大師の額書石といふありこれハ昔し金剛定寺の額を大師に書しめ給ふとて帝より勅ありて勅使来りけるに折から雨雲立て夕立頻に降ければ清瀧川の水増りて橋も危うく見えければ大師志らし召て筆に墨を含せ此石上より額に向ひて書給ふに墨ハ雰の如く飛んで額の面に降かゝる人々怪しみてあるに金剛定寺の四文字現れし勅使意悦して帰りしとなん今に額立石も惣門の東にあり抑当山ハ和気清麿八幡宮の神勅を蒙りて此に精舎を草創し給ひ初めハ神願寺と号く　淳和帝の御宇天長二年に当山を弘法大師に賜へて改て神護国祚真言寺と号く大師住山し給ふハ卅六年金胎両部密乗の宗風大に曜く貴賤を度し什宝に大師の筆迹の山水屏風あり（山水とハ名目を）宗儀密灌の時ましに立給ふ故実あり一宗みなこれに倣して用ふる又当山の鬼鐘ハ世に名高く本朝の名器にして三絶の鐘と称す銘文の撰者ハ菅原是善卿序詞ハ橘広相筆者ハ藤原敏行なり其銘云

高雄山神護寺鐘銘　并序

愛当之神護之寺三宝既備六度無虧唯所有梵鐘形小音窄故禅林寺少僧都真紹和尚始発弘願有心改鋳鎔範未成卒祓早化檀越少納言従五位上和気朝臣彝範悼和尚之遺志尋先祖之旧蹤以貞観十七年八月廿三日雇治工志我部海継以銅一千五百斤令鋳成焉恐年代久遠後人不知仍聊記於鋳側

右少辨橘朝臣広相

銘一首　八韻

伝音在器　證果惟因　余祖初業

厥孫幸遵ヿ宿昔ノ三尺今日ノ千斤
體ニ有リ寛窄ー功ニ無シ舊新ー山聲萬歳
谷響由旬聞ヘ渲覺夢ヲ扣ハ即ヒ歸ス真
慈周世界ニ感及ニ非人ニ雕琢懸趣
蒙叟當仁ニ
叅議正四位ノ下勘解由長官兼式部ノ大
輔播磨権守菅原朝臣是善銘ス
圖書頭五位ノ下藤原ノ朝臣敏行書ス

此鐘樓ハ後世板倉伊賀守の再興之其銘額ニ書ス

當寺鐘樓再興從四位下行侍從兼伊賀
守源朝臣勝重為ニ驚ニ三有之長眠ヲ而使ニ一
切衆生ニ證中佛果菩提ヲ上也

當山地蔵院の林泉ハ客殿の座中より溪間を臨めば清瀧川潺々と
ながれ落尾瀧より谷崖すぐ紅葉ちらぬ所なし此折からは都人の騒客
あまた来りて遊宴せずといふ事なし洛北の佳境の其一たるべし

高雄なるもこれ成るつらぬやさしひ花を敷る川之　西行法師

井性寺
高雄文覚上人哥五首藤原京極禅門許に持参し皆其人孫重之

佛法練行心通和哥花之由記録に書載云々又云文覚上人ハ西行を
にくまれけり其故ハ遁世の身とならバ一筋に佛道修行の外他事
数寄をたてゝこゝかしこにうそぶきあるく条にくき法師なりいづくにて
も見あひたらバかしら打わるべきよし常のあらましなり弟子ども云
或時高尾法華會に西行まゐりて花の陰などながめありきける事
是が縁ぞ上人に告ばやと思ひけれど法華會もはてゝ坊へ帰りたるに庭に
物申さんと云人あり上人そこと問れければ西行と申者にて候法花
結縁のために参りて候今ハ日くれ候一夜此御庵室に候はんとて参りて候
といはれけれバ上人うちにてまちかまへて思ひつる事叶ひぬる事かな
まくあかり障子をあけて待出けり志ばしまもりて是へ入給へとて入れて
対面して年頃承及て見参に入度思ふ所に入らせ給ふ御為悦入よし申ねんごろに
にて物くはせつしてて非時など懇にして次の朝又斎などもして帰し
けり弟子達手を握りつるに無為に帰る事悦思ひて上人に云

さしも西行ほどの人をひとつにかしらうちわるべき御ありまじきひとに
特に人間に御物語ありける事日来(ひごろ)のかせにたがひたるひとゝ申されはあらん
かひなき法師とのやうなる文学ふうなることどもをするものつゝやうり文覚
をこがましきことどもぞ殺着なれと聞けると云々
坊中曼陀院ハ中祖文覚上人の住院之後山に文覚の墓あり七月二十日
忌なり次羅山子の書れし高羽戀塚石碑云 文覚在高雄
遥望埋婦之
處名曰戀塚
類聚國史云
延暦廿四年八月宣勅令最澄師入唐所受灌頂秘法是大法師修圓勤操等七人
為受法弟子於清瀧峯高雄寺奉為桓武天皇修毘盧遮那秘法法師亦在其中
共稟灌頂三摩耶戒是則本朝灌頂始興之日也中略天長元年九月壬申三代格云以高
雄寺為定額寺并定得度經業等正五位
下河内守和氣朝臣真綱從五位下彈正
少弼和氣朝臣仲世等言云云昔景雲年中
僧道鏡以倭邪之資登玄扈之上擅僭法
王之号遂懐覬覦之心偏邪幣於群神行
搆講於倭黨爰八幡大神痛天嗣之頭弱
憂狼奴之將興神兵尖鋒鬼戰連年彼衆
我寡邪強正弱大神歎自威之難當仰佛
力之奇護乃入御夢請使者有勅追引臣
等故考從三位行民部卿清麻呂面宣御
夢之事仍以天位讓道鏡之事令言大神
青麻呂奉詔旨向于宇佐神宮于時大神
託宣夫神大小好悪不同善神悪淫祀貪
神受邪幣我為紹隆皇緒扶濟國家寫造
一切經及佛諷誦最勝王經萬卷建一伽
藍除凶逆於一旦固社稷於萬代汝承此
言莫有遺失清麻呂對大神誓云國家平
定之後必奏後帝奉果所願粉身殞命不
錯神言還奏此言遺時不遇身降刑獄遂
配荒隅幸蒙神力再入帝都後田原天皇
宝亀十一年數奏此事天皇感歎親製詔
書未行之間遇讓位之事天應二年亦奏
之柏原先帝即以前詔普告天下至延
暦年中私建伽藍名曰神願寺天皇追嘉

先以神願寺為寺、為定額。今此地勢沙穢、不宜壇場。伏望、賛高雄寺為定額、名曰神護國祚真言寺。

神皇正統記云　和氣清麿

河内國に寺を立て神願寺といふ。後に高雄の山に移して今の神護寺これなり

高雄のわたりにてよみ侍りし　紀寛耀僧都がもとに
世話にて紅葉を述懐

續葉名

おもはしく従ふとて流されし老らくの此ころからの君も友と待らん　紀阿

梅花無盡藏

溪橋殘楓（遊鷹尾槇尾栂尾、其地在洛外四五里）

洛外秋風溪有橋、見楓無處杖支腰。（上已有醉僧有飯樵）
紅老房々路嘯者、比丘歌者樵。晩梢

北斗集　楓林暮雨高雄道中作　桂林

点々楓林鴉未帰、細雨作新泥幽探
不覺雄峰遠、行盡仁和西更西

黙雲藁　大隠

高雄山口號

紙窓晝暗覺雲過、石燈重々攀緑蘿一月
往来岩下路、樵夫向熟不辞何

色葉字類抄云

高雄寺は原神願寺と號しき。應神天皇の御願寺也。荒廢中絶の後和氣清麿に八幡大菩薩示現有て興隆し、又厥后弘法大師聖跡として眞言教を此寺に傳へ本朝眞言を傳ふる第二番也

元慶八年此寺にも定額寺あるよし國史にみえたり

納涼房　埃嚢抄云今納涼軒あり弘法大師本房とぞ　大師の御像を安ぜり

性靈集

於納涼房望雲雷

雲蒸蓬似浅雷渡空如地颯々風満房祁
々雨伴颺天光暗無色樓月待難至魍魅
媚殺人夜深不能寐

猿窟　土人云高雄の艱嶮にありむかし傳教大師修練の時猿來つて山の菓を採げ御伽に供ぜし

三日坂　神護寺の南十町許是より村に清瀧権現の宮居あり其社前の坂路をいふ

槇尾平等心院の寺前も清瀧川を隔て嵯峨にあり風景微妙の地也此寺も舊弘法大師の上足智泉阿闍梨の基にて其後泉州槇尾山自證上人今を興しけり中古より荒廢せしを慶長年中明忍律師再興しけて今のごとく眞言律院となる


梅尾高山寺
三尊院
満渓霜葉景将曛
翠壁高倉一帯雲
日暮院僧帰澗戸
泠泠鐘磬渡山聞
新羅窮
岩ちる
紅葉の
流れ
浅瀬うか

栂尾高山寺の林泉ハ三雄の其一なり同じく寺前に清瀧川のながれきよく
槙のおほく楓など多き所なり寺説云上古住吉大神の霊蹟にして建永
元年十一月後鳥羽院詔旨下して明恵上人を開祖(又の名ハ高弁)とし華厳真隆
の精舎となし本尊ハ釈尊を安し鎮守ハ春日住吉の二神開山堂ハ明恵
上人の影を安し其傍に廟塔あり春日神影向窟ハ開山堂の渓間にあり
文殊石ハ明恵上人禅坐し給ふ時に文殊菩薩影向ありて光明真言の法七
種の秘印持戒清浄の印を授与し給ふ所にて今に岩面に文殊の種字歴然
たり佛足石ハ明恵上人の作にして今ハ谷底に埋れて旧跡さへわかちがたし
当山の高嶺を五台山となづけ練若台ハ庵の前にあり建保の頃上人
ここに草庵を結びて坐禅し給ふ遺跡之(当山七跡の第一之旧跡)石水院の跡ハ今の
春日住吉の社地をいふ(第二の名跡之)花宮殿羅婆坊ハ春日山の中にあり(是迄の跡)
(第三第四にして)三加禅も其側にあり(あわせ第五)禅河院ハ開山堂の西谷にありて
此名義ハ西天伽耶城菩提樹の前に流るる尼連禅河の地勢に相似たるを

則とし瑜伽之(第六の跡といふ)定心石といふハ清滝川の上にあり(第七の遺跡といふ)
(著聞集)高弁上人(明恵)おさなくて小院御室にいられたり文学坊まゐりてその小童
を見て此児ハ尋常人にあらずと相してはげて此児文学に給ハりて弟子
にしたまハんと申て乞て取り法師になして高雄に住せしむるにかくありて
入れてありしが後にも仏事をせぶらひける文学坊高雄を俗りしそ
番匠をせさせてありしが其事に高弁上人ハ法事にたひて聖
教のりてはじめたりて持て山の奥へ入て人も通ぬ所にて只壱人分なる
まいり益ばりし道を合はせたるを見る時山の中より走りてぐるりと
其飯七八人が分を盛りてしまひて又ありぬ聖教をもちて帰入ぬ
かくの中に二三日も居て出られ次第にある事二三日に一度必有たり
文学坊難事なるにて来て人のふるまひに然ど権者の所為へと思ひ
たる此上人晴夜に聖教を見給ひたる大神基賢が子に光音といへ僧
此の上人の弟子にて侍りける年比給仕して侍りけるが如此なるハさしも

そこ衆も火もともにさびしく霊験を見給ふとて弟子どもに志らく
の詩に応文殿にて給へといひければしばらく誰にもさだめて来りなんて
此みなはあらたに志らくのみなるをたゞ宣ひたるに嬉しきことありし事あり
かくて夕暮に光嵩がきびしく山寺の為に今猶けふに心のまむりのこゝさ
させ日入月又南とて房を出て清瀧川のきはなる方へ廿余町たどり
山なかの中へ入て大なる石有是れ南のほとりにしばしいこひてもやすみある石之
伽藍なかりしのこりたる礎なりやあらん此石などもろともに給ふ
ところぬれまでおもろかを鳴して是を備への物語しつゝ坐せられたるを
寒くおもとらんとてその石上にのぼくに有りしとも覚ぬ有る座
一枚を見出して光嵩に志らせられたる事しだいにめづらしうなる事どもこれ
彼石をば定心石と名付られたるも縁ありての悟真寺の石に模せ
られたるとぞ又縄床樹といひて松有その松座禅によろしきありてぞ
正月の頃松のもとに居て観念せられたるにあられのふりたれば

影勅
暑のうらは松のあかけにてみ深の雅れありれやかけしその玉　高弁上人
此外明恵上人釈尊の霊跡をなげきて弟子十余人とともに相具して天竺へわたら
んとせられたりしに南都春日大明神のつげにて御やさんとくかの渡りをとゞめ
給はれたるに康六十路膝をおりて地にふしてうやまひたる事など
ありあくに略に

梅尾茶薗場　深瀬三本木　梅尾高僧の山の方に古跡あり相傳ていふ
建仁寺栄西禅師入宋して帰朝の時
茶實を三粒將來し漢の小樹といふ茶器に贈りて明恵上人に贈る
郡此地宇治深瀬三本木といふ所に植られ天下茶園の初とぞ　真後
宇治里にうつし植る

茶のうたよみ侍る　明恵上人
春霞高からぬ万にはみちてとけ出るもののかみの春はや弥生

海人藻芥云
茶は上古よりも我朝にあり挽茶節会とて内裏に於て公事儀式を
行ひ給ふに葉上僧正入宋の時に茶の種を渡さる梅尾明恵上人へ立之
翫のもてはやされ梅尾宇治の名産と

明恵傳記云
建仁寺長老より茶を進ぜられたるを醫師に是を問給ふに茶は遣困を
消し食氣を快くする徳あり然ども本朝いまだ普からずとて
其實を三粒植初られたる誠に眠を覚し氣を晴る徳ありて衆僧

みな服せしめられ其

寺記云
深瀬の園ハ高山寺の楼より東北の地をいへり明恵初而茶實三粒
を植たまひし地之因茲梅尾茶ハ深瀬三本木茶と称けり此園今に
あり其茶實ハ三粒入て栄西禅師より進ぜられし茶入を漢柿
蔕といへる山寺一の器なり 又云 城州菟道郡蹄茗園ハ明恵上人
の園なりといへり其所ハ菟道郡五箇荘の内之梅尾山ハそこ冷の地之
温陽の地を求め茶樹を移し植んとて上人馬に騎て巡見し五箇
庄の内大和田に一ツの園地を得て梅尾より茶樹を分移し植たまへ其
園を駒蹄影といへ今に

梅山の尾上に茶の木を植て跡に生へし駒乃蹄影　高弁上人

其園ハむかし菟道殿の茶園之平治の乱に荒蕪をといへ其後茶
園を久世郡宇治里に移をといへり上人ハ茶を植初たまひし由へ古木
より今に宇治より毎年新茶を上人の影前へ献ぜらるゝとぞ

高山寺和事記録云
禁裏御所献茶梅尾諸房目録　地蔵院壱袋 田中坊壱袋 閼伽井坊三袋 東坊三袋
中之坊二袋
已上十袋

大樹公献茶梅尾諸房目録　地蔵院一袋 田中坊三袋 東坊三袋 中之坊二袋 入江坊一袋 已上十袋

寺奉行飯尾大和守江十袋
飯尾左近将監江弐袋

高辨上人書翰云　明恵上人初の名成辨其後高辨と改らる
此書翰今に高山寺にあり

鶴禅房授與師範事奉畏候又兼而仰候茶實未熟候之間
今熟候分聊進之候恐恐

　　　　　　　　　　　　　　　　　　高辨
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丶
　　　　卯時
　　高雄上人御房　文覚

古記云
明恵上人栄西禅師より乞得たまへる茶實を梅尾山に植て其茶の味ひ美
しき時の帝へ献せらるゝ岩上茶より茶味勝れしを叡感有て都茗
と命之給ひそれより岩上茶を都茗と云梅尾茶を本茗とのたまはせら

畠山義就書翰云
就御内書之義二巻數謹目出度候右併連日祈念之験祝著候
猶祈祷憑入候仍而茶到来云名物賞翫無極候事々期

未信候恐々

卯月十一日　　義就 判

田中坊

此田中坊ハ今の善財院也云鶴高山寺の宝庫にあり

龍巖集云　梅尾自古産佳茶而未知有名其山及閲清拙和尚集中同夢窓國師遊梅尾之詩始識古呼為茶山其詩云

幾重峰轉又紆廻行到茶山聰眼開

佛殿東房小樓上夢窓清拙記同来

西齋詩話云

壽上人回自日東其國所産以梅山茶見恵賦詩謝幸得梅山信初嘗日本茶

尺素往來云

梅尾者此間雖衰微之體候名下不虚諺不可忘思召候朝日并深瀬之走摘閼伽井逆淵外畑小畠等云々

遊覧往來云

茶ハ深瀬小畠天狗畠一瀬外畑岩傳門不見橋返鐘樓花禅河院云々

異制庭訓云

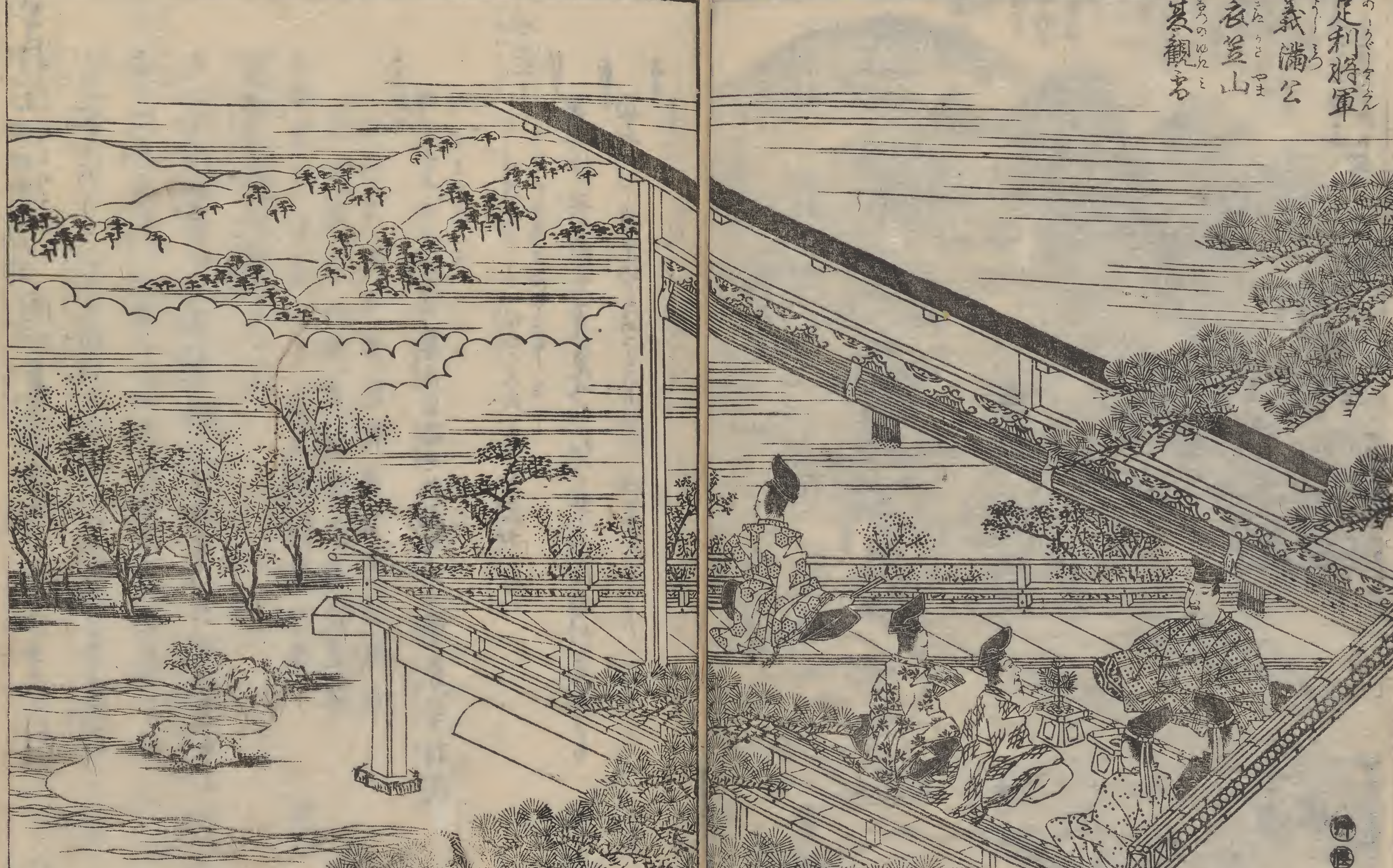
吾朝茶之寵宅以梅尾為本也開山禅師依習禅勤行之障腫魔為強敵為彼退治降伏植茶而為精進幢傳賢首之大教窮秘密之奥談故經云以因分可説但為利益説之真詮為茶之末以果分不可説我本無有言之秘宣為茶之本也過土洛陽之名山名所如雲如霧各誇其家之春雖朝他山之景皆是為城州梅尾和州清滝之末流也　又云我朝之茗山者以梅尾為第一也仁和寺醍醐宇治葉室般若寺神尾寺是為補佐此外大和寶尾伊賀八嶋伊勢河居駿河清見武藏河越茶皆是天下所指言也

茶壺純狂言云

抑も私主との中国一の法師あく鄙の茶をさそへ来年からいちもくに寄合ふ本の茶をたてんと又十ろんのこりをうちおほくのちりとはく宝庫の津にも着より兵庫を出て二日に梅尾にも着しやうじの坊谷の坊特に名蘭しるく閼伽井の坊に枝先を十行年笑たる壺にうち入てしろふせあふて国をさして下る　下略

近年寶暦中梅尾茗園記抄と金龍道人著にまた略しくあくに出たのこ


等持院
夢窓國師作之
衣笠山
清漣亭


足利将軍
義満公
衣笠山
遊観図

等持院 葛野郡等持院村にあり 開山は夢窓国師なり 天竜寺十刹の内なり 林泉に芙蓉池あり 風色雄雅なり 足利家代々の昭堂は慈照院義政公の建る所 其后足利将軍十三世悉く像を安す 仏殿の本尊は釈迦仏 左右阿難迦葉 中央果證の額は尊氏公の母公の牌所 登真は同公の室也 霊寿は同息女なりといふ

五鳳集云 暮春北寺看花時住等持院　蘭坡
天公背支巧相違　北寺花多南寺稀
百萬買隣今不悪　袈裟角裏落紅飯

太平記云
延文三年四月廿九日尊氏公逝去し衣笠山の麓に葬等持院
今方丈の後山に塔あり

衣笠山 古へは衣笠岡と称せる事多し 等持院領なり 後山之又西に至つては龍安寺領也

続古今
春にはや衣笠山をきくらんは結つてきそふ花の衣有るを　読人しらず

夫木
雨ふれはきのふのそはさる早蕨や衣笠山の春しらるらん　為盛

名寄
夏深れはえぬらき山の夕立のつゆにも袖はぬれしとあり　為秀

衣笠殿 今の等持院旧跡なるべし 正二位後原家良公の別荘なり 園太暦文保二年ノ記云 仙洞此間御衣笠殿云云

増鏡云
文永のはじめつかたより悩み給ひし新院は後嵯峨院の更衣おもてなるとかしと云 仁和寺の衣笠といふ所に住給ふ

帝王編年記云
永仁六年七月十九日天皇行幸衣笠殿
正安元年九月九日法皇於衣笠殿有如法経十種供養事 新院御幸

中務内侍日記云
まんきりん院の御所きぬかさどのへ九月十三日にまゐられしにも人々おほくさうほう院の山あくすげらんやかあり

新後撰 正安元年九月の比衣笠殿にて如法経かかれし時三七日の懺法ことひさしき日にあたりて名残おしみおもひて人の返事に
おほゐなる暁おきの鐘の声もつよくひゞきけるかなしさ　法皇御製

衣笠岳御霊 六所明神と称す 松原村等持院門前の生土神なり 例祭九月廿一日 等持院真如寺みな此社を鎮守とす

夫木
神まつる衣笠山の岩の松久しくたてれとそいのりこそすれ　隆房

拾玉
この春へきぬかさ岳にせりはまく神に手向るかさもせん　慈鎮

龍安寺 方丈 林泉

むかし細川勝元あそふ別業なりかの人住せらるゝ時は書院より毎朝男山八幡宮を遥拝ありしが故に庭中に樹を植ず奇巌をならべて風景を催し侍るこれを相阿弥の作りし人名づけて虎の子わたしといふ洛中の名庭の第一なり後年洛の外れ古松多く茂く昔の風景衰へとなる其上近年方丈回禄しあれはむかしを情を慕れ侍る

一庭空曠白砂平
頑石誰鋪形勢成
宛似昔時渡渓虎
分明両子泛波行

皆川愿




龍安塔頭
西源院（さいげんゐん）
衣笠山
月さし
夜笠山の
暮れうく
蘿嵩

真田墓

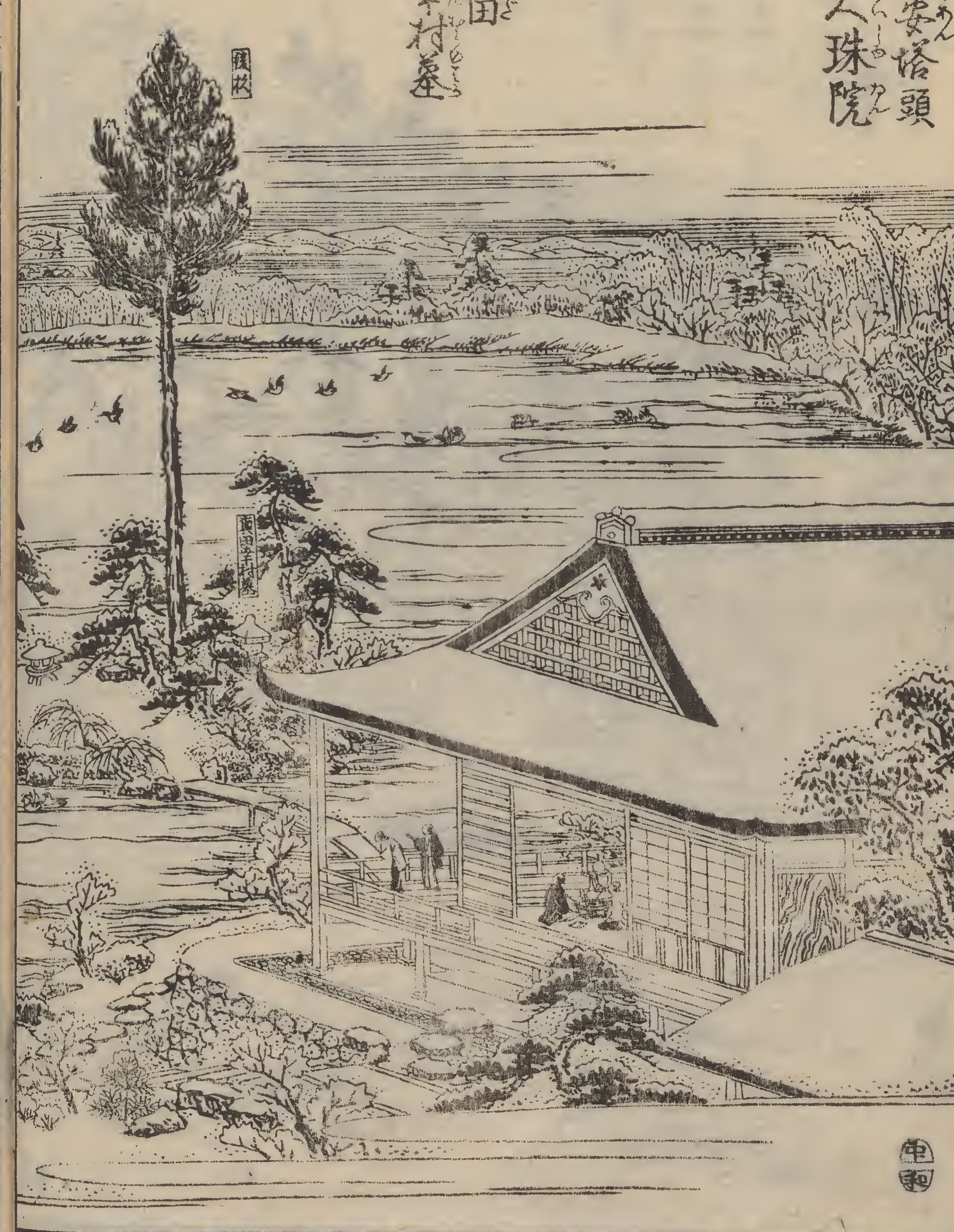
風雷半夜呉王墓
天地清秋伍相祠
成敗古今共陳跡
林泉深處吊軍師

松窠杜徹



龍安塔頭 大珠院

眞田幸村墓



龍安寺の林泉ハ封境に名池あり鏡容池と号く冬日鴛鴦多く聚
まる洛外の眺望世に名高し池中に二ツの嶋あり中の嶋ハ伏虎といふ
いふ又水分石といへるあり霖雨の時ハ石上へ水越ゆれども西の方乃樋より
上る水落る三笑橋といふハ東の方にあり当山に八景あり是なり
方丈よりの遠景をなして風色よし

東山仏閣　八幡源廟　伏見城趾
淀川長流　東寺宝塔　花園暮鐘
雲山帆松　衛院紅彩

所謂方丈の庭ハ相阿弥の作にして洛外名庭の第一とす
庭中に樹木一株もなく海面の躰相にして中に奇巌十種ありて
嶋嶼に准へ真の風流にして他に比類なし是世に虎の子渡しといふ
抑此地ハ文明年中細川右京大夫勝元の別荘なり此人書院に坐して遥に
八幡神廟を毎年拝せんが為に庭中に樹木を植させずとなん初め此地
後徳大寺左大臣実能公の別業なり同じく公有公の代細川勝元に譲れしと

著聞集云
文治の比後徳大寺の左大臣におもしろき附徳大寺の亭に池泉を
かまへられし中御門右府へ案内申されたりければひかれけり其時
三条の左府入道ハ右大臣中山相国入道ハ別当にておはしけるが
扈従してひかれけり亭主も興を用意してひしく待ち侍ハ人に物
おもしろく左府の車はせ寄へむかへに参らせられたりけれハ志ばしありてめでたれ
申されけれどもあながちに申されけれバのりて泉えにおりたまひけり　中略
其の時此院の御室威法ある法師にて寺中にきこえ給ひたりけるが此事を
志りて還俗の事を申されけるを仰ある事にてこのおもむき小泉にて
かまへてひふ左府をしられけれバ入御ありてめでたくのよし申されけるとなん
庭のうく渡御ありけるとぞ
塔頭西源院と今假方丈と号す近年方丈に経蔵ありて釈迦迦葉阿難の三尊を安
ず開山日峰和尚の像を安ず襖の画ハ中に間雲谷金極彩色の仙人尽東涌
竹林虎西間琴碁書画杉戸　表象　裏亀僲ハ狩野永徳の筆なり此院の
林泉又風流にして上段の北に茶室あり額蔵六と書す正法山
桂南の筆く当寺の後山絹笠山めぐりて一日の壮観あり

塔頭東皐院の林泉は遠来を興じ庭坐にして八幡山崎淀川のながれ
小倉の江伏水鳥羽羽束師など鮮にみえて風光微妙なり
同大珠院の林泉は鏡容池西の方に巡りて庭中の景となる池中の嶋
石橋など以て嶋の中に緩枝といへる名木あり株の皮目に塵ありて緩縮
に似たり葉は花の杉に等し高さ二丈許東師の珍木也其木下に墳墓
あり中に真田左衛門尉幸村の墓あり五倫の石塔婆を建て法号を鐫む

幸村法号 大光院殿月山白大居士　又当院の碑に慶長二十年
幸村ノ室 竹林院梅渓永春大姉　乙卯五月七日没
幸村の女の碑に真田氏の家系に係く什宝二幅附なり当院にあり山人ハ石河備前守の室なりしも
。画賛 俵屋宗達筆 。布袋の画 同筆 。唐画の鹿 筆者不詳
。金紙屏風 一雙 。蓬画金屏風 一雙 。狩野の錦 掛軸形
龍猴の絵あり其外に道具数数品あり 嘗に当寺就之当院を
石河備前守の菩提所にして 太郎の後 観蜀の図なを門く
あくに建らばく
とうぞ ゆうえし

花園社 妙心寺の西寺町許路傍の南にあり祭神花園左大臣有仁公なり
土人今宮明神と称して生土神とす
續古事談云
後冷泉院の御時世ことにさわがしかりける時並園の辺に社をあはれ
志けれる屋にして示現ありて云兵衛府生時元をしてめして兵衛府
のそのとも社をはぐりて御霊会などをおこなひあり花園社といふそ
はじまりなり

頓阿古蹟 旧跡は妙心寺の西にあり頓阿法師山荘なり今さだかならず今時
洛東双林寺の内にあり蔡花園院の額ありあくの古跡なる
所のわたりをそ名所にほゆ
にうつされより

迎陽文集云
柳く蔡花園院者平生棲息之間地終身安
山之幽荘也
頓阿五旬願文應永五年四月弟子法印
大和尚位権少僧都経賢敬白

花の比関白殿蔡花園にいらせたまひて
山の花といふ心をよませられしに　頓阿法師
続草庵
ながむる花の春ごとやあらそふ世を花さくらの陰にすまひに
同
世のうきにかへしてこそすまひしなれ都にちかき山のあなしに　同
仁和寺の庵室にて
蔡花園に侍りて法華の読誦室本寺に
神楽庭の花などひとり眺めて
家集
世をひなたるなる人にこうれ身をひそみ山の花の陰に　尭孝


妙心寺
玉鳳院（ぎよくほうゐん）
花園法皇
御殿
名院曾テ聞ク
玉鳳聲
幽庭今見ル
翠光清シ
林ハ
當ニ是
靈會ノ化ナル
時ニ拂フ
輕風
仙韻ニ
生ス
皆川
愿



妙心塔頭
大通院
当院の林泉ハ
奇樹奇石多く
しく此塔中
第一の名庭
なり一代れ
住職湘南和尚
四方海巌より
おさくこ庭を
作りしよし
湘公豈忘故
丘情遊戯径
年一小瀛樹
石千般後甲
浦山川
萬里輸
京城白沙
無水分洲色
瑶岍多松弄
海聲鮮道
飛峯不胡
説園中幽趣
禮佳名
三浦世纘

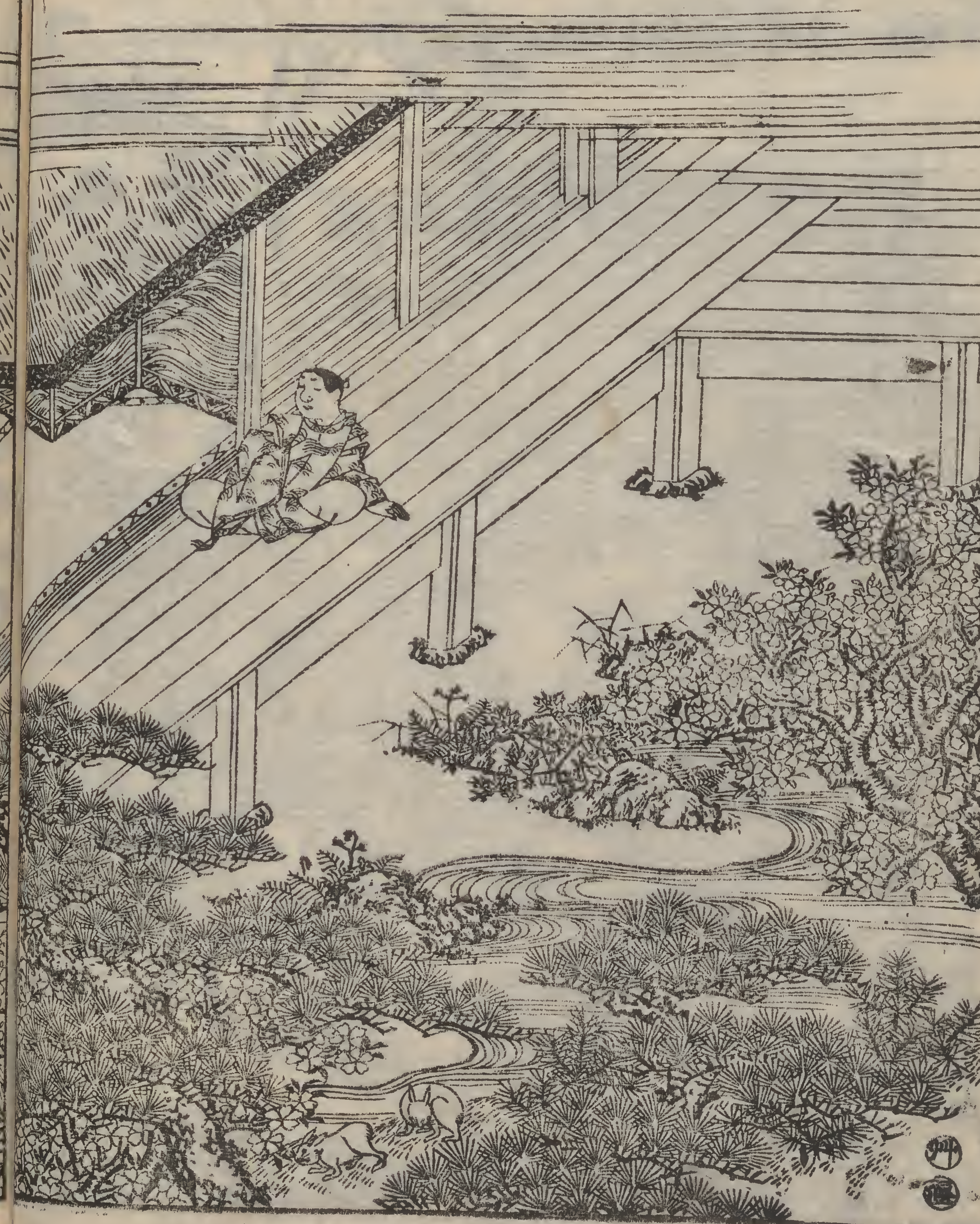
大通院　其二

苔深石逕掩
喬柯返景照
林嵐翠多野
鳥時傳虛谷
響山庭疑是
坐雲蘿

百々峯



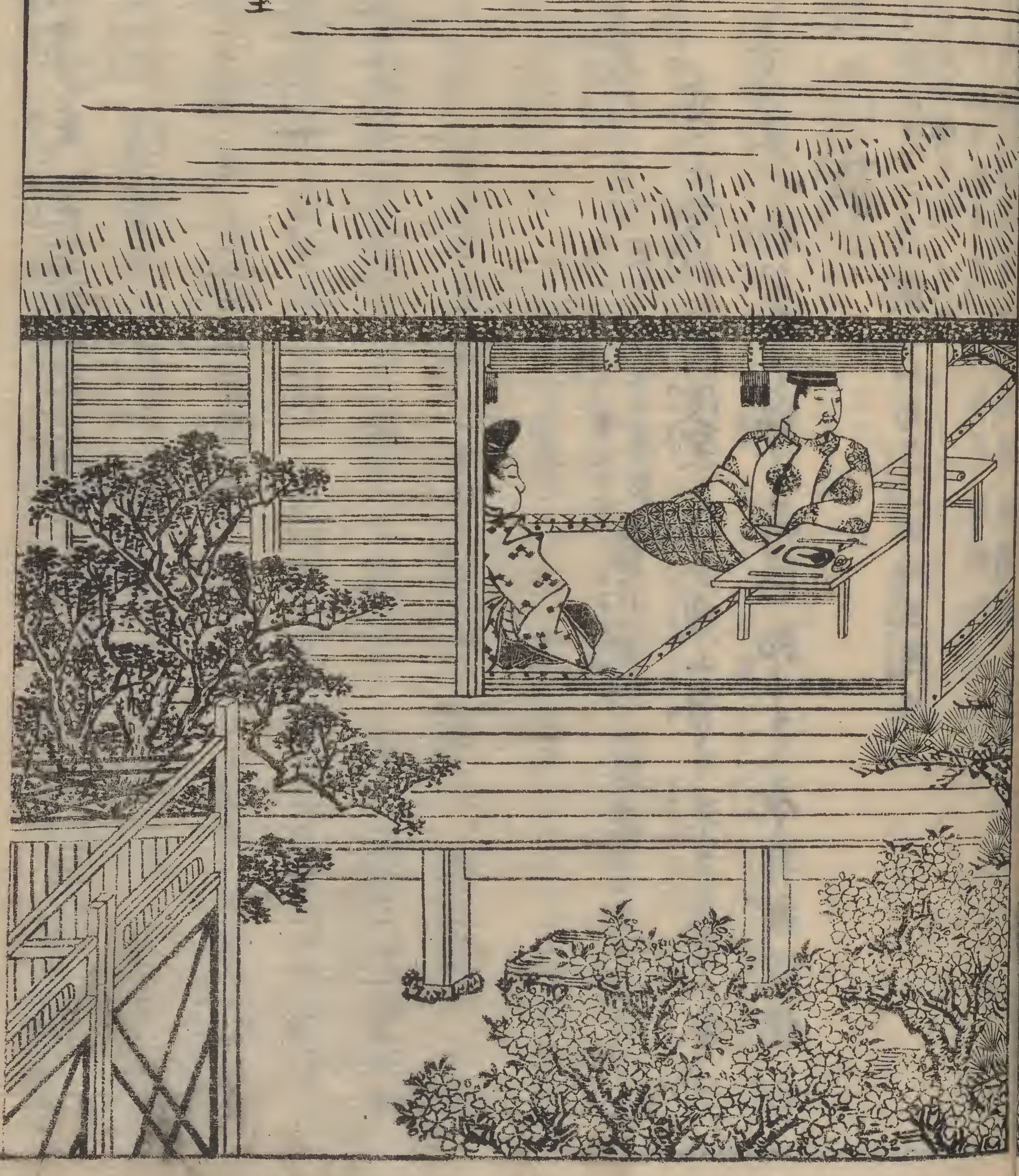
花園輔仁親王山亭



盛衰記云
輔仁親王
仁和寺の花園
といふ所に住せ
玉ひけり白河の
法皇より兄にて
御才も猶く引籠
らせ玉ひしか
憚なき御出
あらんと候へし
との御返事
ふ

有花有獸
山中友無愁
無歡世上情

輔仁親王



正法山妙心寺ハ元 花園法皇の離宮也〔人皇九十四代花園天皇と称し後伏見院の皇弟也在位十一年聖寿五十二歳〕其ハ初ハ後二條院の皇孫花園左大臣有仁公の別荘也其後裔相継
く傳領せり然るに花園法皇地景を愛したまひて離宮としたまひ法性禅法に
皈し此所に閑棲したまふ信州高梨高家の孫に恵玄といふ僧あり
相州鎌倉建長寺広厳和尚に謁して薙髪し洛北龍寶山大燈國師
に法嗣を此時法皇離宮を捨て恵玄に附属し詔して開山國師と称
し当山の開山とす 法皇ハ伽藍の東に一院を創して禅坐したまふ
これ玉鳳院といふ〔これより先き皇居を萩原の別宮に移す〕 開山國師ハ延文五年十二月十二日
寂す年八十四 第二世授翁和尚法嗣として大衆に告て丈室に歸入本山北
艮の隅に塔を建て微笑菴と称す其後 勅して本有圓成佛心
覺照國師と謚す

○山門 慶長己年三月鐵山和尚住山の時成就す
楼上の偈を作って曰

烏藤拍手叫令辰 五百僧房萬物新
東帝歌花酉鹿月 山門鬼舞洛陽春
鐵山

○佛殿 亀年和尚住山の時天正年中脱舩和尚創建を則 虹梁の縁族
額しく詳く 本尊釈迦 迦葉 阿難 脇檀に建立す 東の方
西丈 開山國師の牌 大燈國師の牌等 厨子に安す
大元像 客守菩薩像 其外 将軍家 神牌を安す 又
後柏原院 後奈良院等の御牌を安す
花園院 後花園院 後土御門院

○法堂 初ハ法堂なし開山三百回忌の前剃建す 傳云此堂乃
紅梁ハ本来の松二本各長サ九間末口の径五尺八寸
本末等し日向國より来るを求む其比海に板に浮べく左右に
釘し海中を渡す舟子数十人本の上に在て櫓を揺し又左
右に立て渡れく其よ大坂の河口に入淀に
これより淀川を引上げ淀の城下より車に乗せて一條より
洛七十間ばかり旧く香付より大宮に向ひ時の所司代板倉
伊賀守殿の指可をうけて二條城の馬場を牽き下立売より妙心寺
に到る京師町小路の老若出て見んとて群をなし本寺の
其大材の上に在て木遣の音頭の者三三郎といふもの
も見物の者も声を出して人々まで勇しむ圖之進
と運送れ此時右の人これを圖絵に画き國郡しく肆街に
此堂の柱ハ花井紹隆といふ人富士山の麓より掘出
しく悉寄附す

覆椽畫龍 法堂天井の画龍ハ狩野探幽法印守信の筆なり
其後一山の大衆議して曰洛東東福寺法堂の
龍ハ初メ兆殿司紙に畫てありしが板上に貼して年久しくありし
風に吹れて破散す今ハ狩野光信が筆なり当山も直ちに
板上に畫きなへと守信に乞ふ帰毫を揮ひ墨彩を
施し暇日をかけず點睛の日係る風雲瑞にへしく室乃

氣色ただならざれば人みな是を奇異とし其謝恩の少しく白銀
弐百枚酒樽十擔に餅菓子探幽初意に思ふ人ハ此謝儀あらば
千枚二千枚にも遣ハさるべし忽ちあまたの落款ととも敢て謝を
受納せば衆僧其議をなし三千枚をも探幽が謝を受べし
しぞく云初メより書労を当山に喜捨して一毛の謝をも受ず
と悦べく翁ハ天井の画を去ル此書翁ハ古今に双なしと後に
此天井画龍の規範とする中華の大慶観乃
李懐仁が画龍も亦美なるを擅ヲ獲る此龍の業盛都く
日本に於ても
ものなし

○**毘盧藏** 法堂の東にあり当山の経蔵之額ハ伏見院の宸筆
毘盧蔵の三字なるを掲る此堂の再建ハ元禄九年
大坂淀屋古庵といふ人若黄金一千両を
寄附して建る所なり

○**四派松** 仏殿の前にあり いにしへより柏樹と植かへ今ハ四松あり
当山に於て龍泉派東海派霊雲派聖沢派乃四派
あり故に
名とす

○**雪江松** 仏殿の東にあり老樹の大松屈蟠の枝蒼々として
当山の美観之初メハ衡梅院の内にあり伽藍東西に
聞くは此松外面とする当山六世雪江和尚衡梅院に住職
しかるゆへ名とす

○**鐘樓** 経蔵の側にあり

鐘銘云

凡鐘ハ者欲レ令ニ聲大一故ニ必ス作ニ蒲牢一造ニ鯨魚一以テ
撃レ之則大ニ鳴ル矣今茲ニ清和天皇十代山
名氏義範公之后裔十六代豊國公法名
禪高其仲子豊義公其阿娘天祥院殿玆
雲妙大姉ノ慈母ハ者木曾氏也妙大欲下以テ有
為財ヲ修ニ無為ノ果ヲ鑄ニ巨鐘ヲ用テ寄ニ附吾山上其蒲
牢ヽ也吼ニ正法ノ月ニ則打ニ破ス百八煩悩ヲ其華鯨
也聞ハ洛陽城ニ則驚ニ散ス八萬塵勞ノ暁ヲ韻傳ヘ精
舍ニ晨ニ音徹ス梵天ニ聽者得ニ三徳ヲ觸者解ニ十纏ヲ
鳴呼這箇ノ耳功徳至ル矣盡ル矣加旃森千森
上座請レ銘ヲ不レ得レ辭ス厥ノ銘云

見鐘在レ簴　内空ク外圓　樓臺高聳ヘ
虚谷聲傳フ　鳴依テ小大ニ　徳以ス聖賢ヲ
陰ト煙雨　晴テ吼ニ霜天　破ニ愚蒙ノ睛ヲ
驚ニ煩悩ノ眠ヲ　洪音無レ盡　信力彌々堅シ

萬治貳巳亥年霜月念日
正法山妙心禪寺住持比丘森巖叟銘

○**西鐘樓** 方丈の西にあり **黄鐘調大鐘** 此楼に掛る鐘の中に銘あり 甚だ古代の作なり其銘に曰

戊戌年四月十三日壬寅收糟屋評造舂米連廣國鑄鐘

右都ゟ一行廿二字ニ鐫れ戊戌の年暦分明なれど欄屋を號する州
の郷名ハ辞ハ地名造ハミヤツコと春米ハ氏なしく連ミムラジ
廣國を名とす寺説ニ云此浄ハ嵯峨浄金剛院の浄なり此る
人しハ荒廢しぐ浄も民間の手にありあつは心寺の敎
を擔ふく京師ニ出る者あり開山國師あまて見外云ク其
浄ハ何れより何より持來りやと浄主の云ク持傳へしが嵯峨浄金剛
院の古跡に棲く農具鍬鍬の浄村中ニ久しく持なり今日
京師に出し農具の浄ニ交易せん爲持あり國師
悦んで幸ニ此寺ニいまだ鳥浄なし我ニ讓て與へよとて類
なへぞ農人悦んで錢を取て多ニ貴く嵯峨へ歸るそれより
國師嵯峨に至つて浄金剛院の浄なる
事なれしあくに掲げあり

嵯峨古圖抄云
亀山殿の東ニ芹川殿艮ニ萱殿ㇾニ北殿あり其北ニ浄金剛院
小殿の西ニ壽量院あり其西ニ業州院其ㇾ多ハ法華堂あり大堰
社の東ニ河端殿の御所あり今の深川ちの地ニ當まりと云云

嵯峨志云
檀の太后此寺をたてられし檀林寺といひしが今ハ破壊して礎
ぞうりに残りしれハ其の跡ニ浄金剛院といふ御堂を建させ給へる
道觀上人を長老になされて浄土宗をおこる

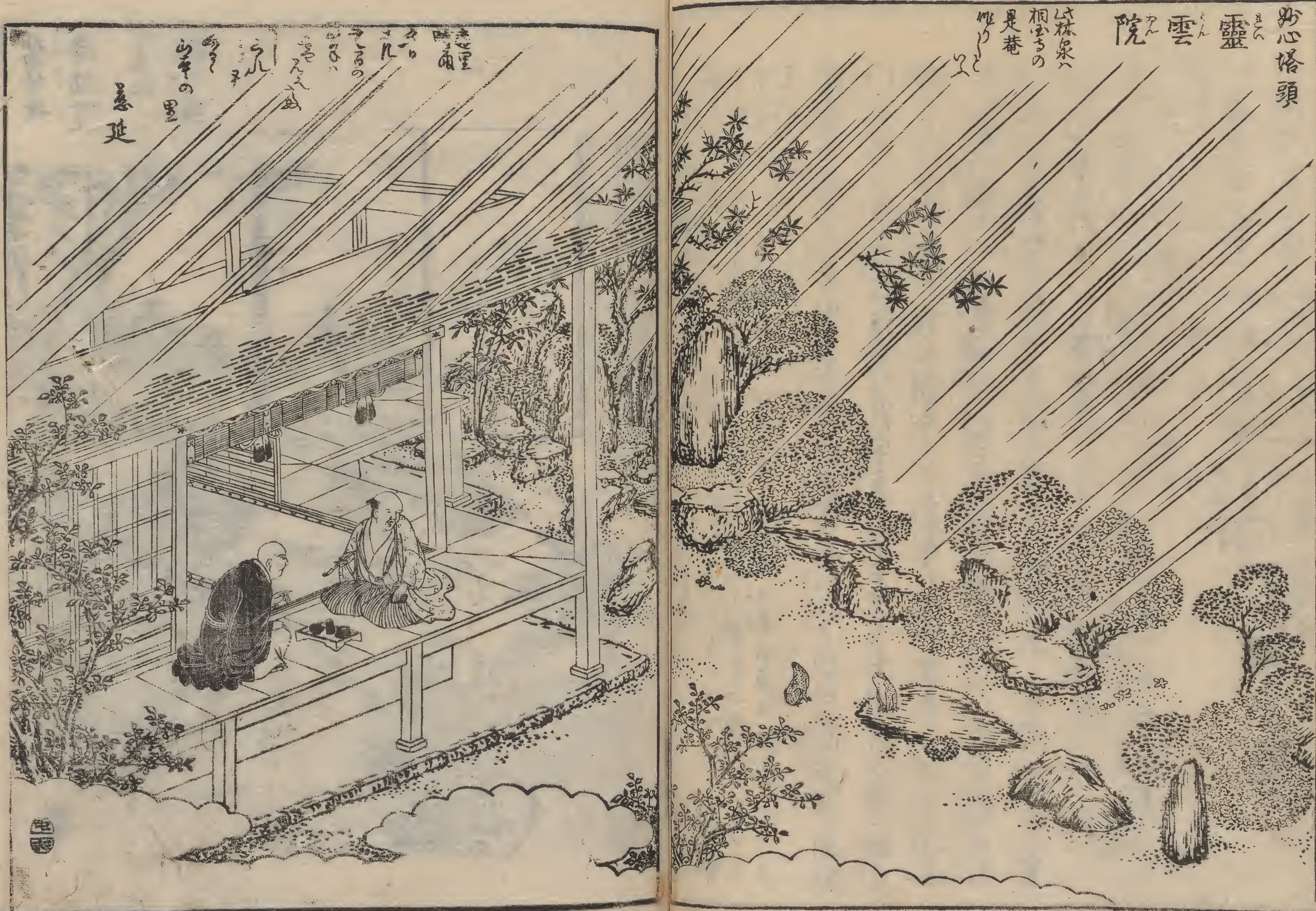
玉葉
いく里ゟ嵐につきて吹くゆるんかならむ寺の入相乃鐘　浄金剛院ちくとよませ給ひける　後嵯峨院

つれ〳〵草云
浄金剛院の鐘ハ聲又よろしれてうん
樓ちに浄金剛院ハいにしへ天龍寺の北にあり此る建立の時院ハ荒廃
し古跡のを残さる故に旧號とす川く小嵯峨二尊院の門ニ再営せり
是れをつれ〳〵草の註書鐵槌につきる山の南太秦の東ニ旧跡ありと
書しハ謬なるべし

當山ニ十境の風景あり第一亀山ハ乾の方仁和る山といふ高安瀧ハ南の
門おふにあり度月橋此流ニいふに宇多川ハ當山より東の方北を流る鶏足
嶺ハ小の山南並塔ハ南方遥なる東寺の塔北遠景之齋宮杜ハ
東方の川端ニあり舊精田ハ當寺の内花園の旧跡い百花開る大
雄院の南恵林院の北の方北深谷といふ麒麟窟ハ花園法皇の宸
影を安ずる所ニして麟徳殿とも號して玉鳳院の中ニあり已上十景

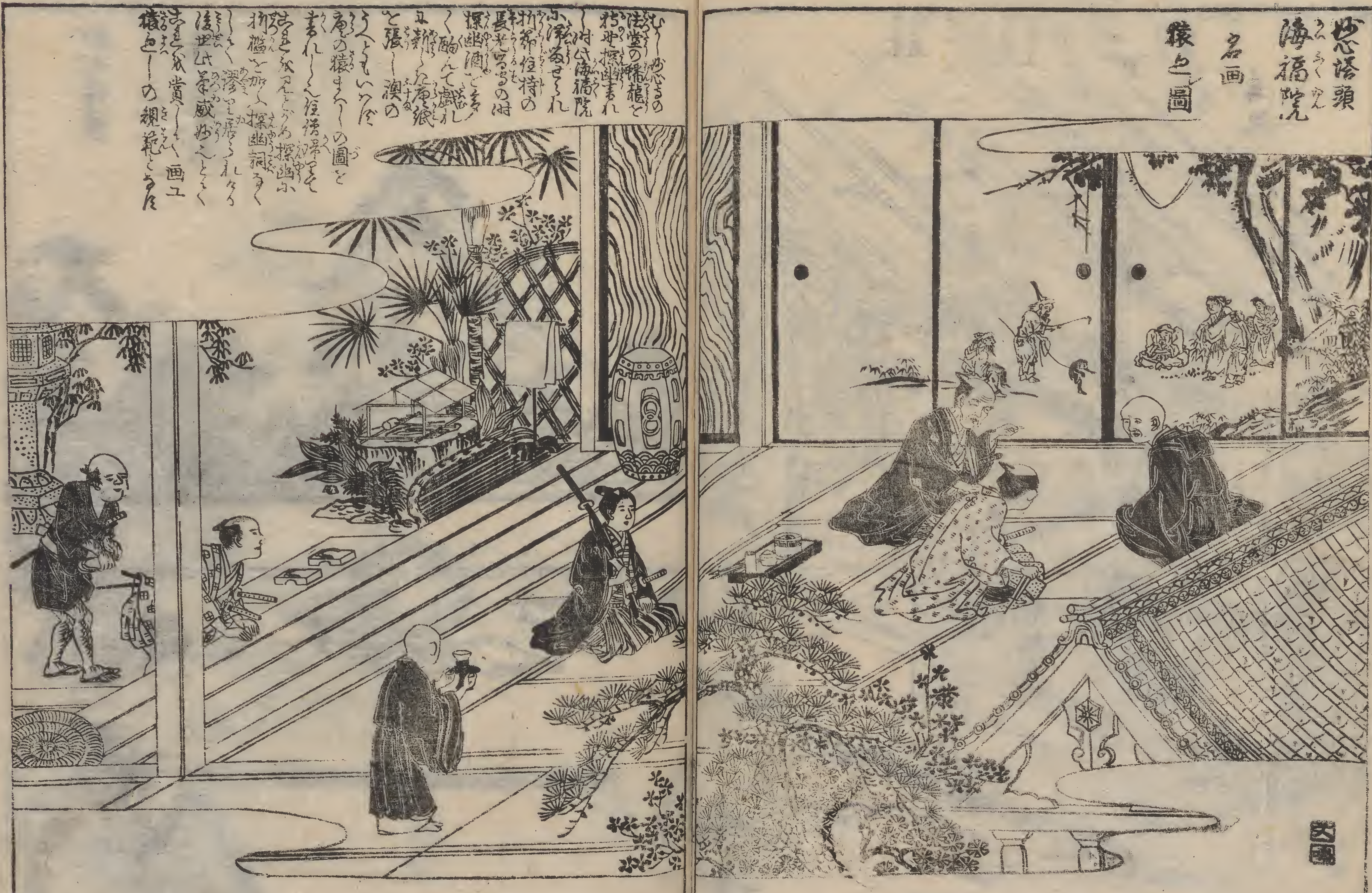
○方丈　法堂の北ニあり唐門ハ大原和尚なまだ建なる方丈の額ハ
天和三年ニ南より移しく點心寮を作る勅使参嚮の時ハ
あくなく點心を進む方丈東の椽ニハ
勢殿立つをして嚮慈次

同南ノ方三室　東ノ間中ノ間　探幽筆
西ノ間　采女益信筆　後号洞雲
東ノ間中ノ間　狩野主馬筆　西ノ間　探幽弟子教之
同北ノ方三室
西南ノ間　探幽筆　北西ノ間　采女筆


妙心塔頭
靈雲院
山林泉ハ相国寺の是庵作りしといふ

妙心塔頭
海福院
名画
猿之圖

むかし妙心寺の
法堂の蟠龍を
狩野探幽書れ
し時此海福院
に滞留せられ
折節住持の
長老留守の時
探幽酒を多く
く飲んで戯れ
又新らしき唐紙
を張し襖の
うへともいハず
庵の猿あまたの圖を
書れしを住持帰寺ありて
是を見て大にいかり探幽に
折檻を加へ探幽詞なく
しりぞく後に遠慮せられ久しく
後世此筆蹟妙なるとて
是を賞しけり画工
猿之圖の規範となる





妙心塔頭
雑華院
此林泉ハ日蓮宗僧玉淵の作として庭中れ奇巌の像十六羅漢と表するとぞいへし

妙心寺方丈虫拂体

後西院再興綸旨
正親町院居成綸旨
後柏原院紫衣綸旨
後土御門院再興綸旨
後花園院宗門[illegible]綸旨
崇光院開山再興綸旨
桃園院國師加號綸旨
東山院國師加號綸旨
後西院國師再號綸旨
後奈良院國師號綸旨

花園院 宸翰
花園院 南都
後水尾院 應無
後水尾院 拈華邦[illegible]
後水尾院 [illegible]而生
光明院 [illegible]國師號綸旨
後西院 敕額綸旨

○東室間上段

勅額 横物
花園院宸翰
花園法皇御影
同 花園院宸翰 往年
後奈良院宸翰

[illegible]花園法皇御[illegible]の日[illegible]徒[illegible]妙心寺[illegible]

開山袈裟 一箇
同 掛絡 一領
同 布衣 一衣
同 七條 一服
同 傳衣 一服
金襴二十五條 一服

○右東室間

櫻町院宸筆 御制衣
附 [illegible]

開山 藤環
同 葛籠
祥雲院殿 尚宗 劔 一振
同 唯朱道具[illegible]
同 碼碯鉢盂 壹

○祥雲院殿ハ太閤秀吉公の所[illegible] [illegible]君の法号なり 以下小[illegible]

大應國師像　寧一山賛

虚堂和尚像　自賛

大燈國師影　自賛

龍圖　楊月澗筆

大燈國師與開山國師印證

開山國師像　古江和尚筆

開山國師與授翁和尚印證

虎圖　楊月澗筆

○東室ノ間

總張附山水　狩野探幽筆

布袋和尚像　李龍眠筆　同偃溪賛

達磨大師像　門無関筆　禮滅翁賛

豐干和尚像　李龍眠筆　同偃溪賛

右三幅對

開山國師號大燈國師号

羅漢像　八幅　兆殿司筆

同　八幅　同筆

大慈禅師墨蹟

鶴圖　徽宗皇帝筆

孝賢像　馬麟筆

鷄圖　徽宗皇帝筆

○西室ノ間

總張附　狩野孝信筆

朝陽　梁楷筆　冲癡絶賛

達磨大師像　顔輝筆　明獨孤賛

對月　梁楷筆　冲癡絶賛

右三幅對

臨濟像　大慈和尚賛

寒山　默庵筆

拾得　默庵筆

布袋像　牧溪筆

初祖画像　曇西硐賛

二祖画像　同　賛

三祖画像　同　賛

四祖画像　同　賛

五祖画像　同　賛

六祖画像　同　賛

左右十六羅漢　祭山筆

觀音像　思恭筆

山水圖 唐伯虎筆
愍山德清 墨蹟
山水圖 唐伯虎筆
釋尊乳供像 呉道子筆
山水 牧溪筆
觀音像 牧溪筆 無準賛
達磨像 古法眼筆
觀音像 牧溪筆

寒山 然可翁筆
觀音 同筆
蘆雁 同筆
鐵拐仙人 呉小仙筆
柳ニ燕 呂紀筆
仙遊圖 文徴明筆
山水 石鋭筆
花鳥 呂紀筆

○西室次ノ間 總張付 探幽 [illegible] 筆

山水 [illegible]
姚仲臣 [illegible]
老子騎牛圖 [illegible]

○小方丈 花鳥圖 斤山尚景画
○杉戸 花鳥 同筆

龍 探幽筆
維摩 同筆
虎 同筆
右三幅對
出山釋迦 探幽筆
達磨隻履像 益信筆
趙子昂墨跡
人物 東坡筆
同 同筆
同 同筆
畫錦堂記 [illegible]
醉翁亭記 東坡筆 石摺八幅

○食堂

屛風 四 [illegible] 六面 [illegible] 六面
屛風 [illegible]
屛風 [illegible] 六面
屛風 [illegible] 六面
[illegible] 鶴画屛風 [illegible]

妙心塔頭
蟠桃院

林泉奇巌多し直入書院の画ハ狩野永徳筆又ハ當院額蟠山和尚の筆蹟也




妙心塔頭
大嶺院
当院の林泉は藤村庸軒の作といふ
中和

○後水尾上皇宸翰

思ひ入る眉ひらきあしく花なる梅ゟ桃の

亀年和尚南山関山國師二百年回之時香語云

一枝微笑梅耶杏

○豊太閤秀吉公御子棄君御持物

黄金作産衣鎧　一領

総金細工緋威

○寶劍　棄君御守刀鞘に黄金をもつて倶利迦羅不動の像を彫る後藤祐乗これを鐫彫す精妙比類なし長七寸八分

傳に云此寶劍ハむかし俵藤太秀郷所持の鏃なりしを鍛て劍とす近江国勢田橋に於て秀郷蜈蚣を退治せし其矢の根なりと云しかして代々秀郷の後裔蒲生氏の家に傳来す飛騨守氏郷に至つて秀吉公の寵を蒙り奥州會津若松の城主として禄九十一万九千石を領す棄君誕生の吉瑞の名劍として秀吉公にこれを献ず太閤喜悦ありて棄君の御守刀とし棄君三才にて薨去の後遺骸を祥雲寺に葬む此寺ハ大佛今の智積院の地なり祥雲寺殿と号し後東山妙心寺に移故に寶劍鎧兜及び器物ともにみな此寺の什宝となる俗に云蒲生氏深き此郷此宝劍を献ぜしより蒲生家年を經ずして衰ふ子息秀行三帝の世に成て會津を没収せられ宇都宮十八万石に遷され奥州へ賜ハりしとぞいへり

○五鳳院　法堂の東の方南面也　初め此所花園法皇宸居の御殿あり崩御の後院號なし宸書の尊影を安置して南面に唐門あり　詩に云　大坂左右房門　太帝金を散じて麟徳殿　瑞詩の方丈をいふ唐の憲宗皇帝の宮たまへ古より此建名義を摸して初めて此地に麒麟閣あり此名義ハ漢の宣帝功臣を此麒麟閣に圖し雄名を賞して漢書の註に麒麟閣ハ蕭何が造る所なりとて秘書を蔵む

麟徳殿　東ノ間 山水　中ノ間 龍　西ノ間 桐に鳳凰　永徳筆

法皇宸影の間　横額 法皇宸筆 額 五鳳院と書す唐戸の上に掲る

花園法皇宸影　坐像法服着座萬德子権色花紋八ッ藤　右に念珠左に扇子御長ケ凡七八寸許

後屋に八角の圓屋あり縁黒漆地板金濃段階二級黒漆長押の上總花菱金濃其四方ハ黒縁其下に唐戸四枚地黒漆にして鈿螺を以て畫を飾る四幅對のごとし読に云此唐戸ハ唐玄宗皇帝の寢殿の奥にしたる唐戸の内に水引あり花色地錦中央に紅の菊　掲る其内陣に宸影を安置し右の間の四ツ間の外に左右南向に一間づつ壇あり内金濃口黒漆の障子其東に安ずるハ将軍家御代々の神牌西の壇には

祥雲院殿畫影　寺ハ則寂坐像ありて是ハ秀吉公の　信長公　信忠公
秀吉公　武田信玄等の牌を安ず左檀の前中央に紫銅二重寶塔あり
高三丈　其中に唐木の色藩黒くして昭木の如く作りたるなり　扉に南無観世音菩薩乃文字
許
あり此字ハ　後水尾院の御爪にて南都圓照寺宮文智尼公の御細工之
此尼公ハ　後水尾帝第一皇女御母一位局四辻大納言公遠卿の女なり　又　後水尾帝御髪水入とり則て此佛号の
後光に准しあり

○枯華室此所法皇の玉座之　右方丈東檀の東方八間の御向　額　枯華堂　横額　総江和尚筆
當山六世之間也南面長押の上に掲る　間の内に壁東ノ方に寄せて床あり金張附畫ハ菰蘆荻菊（？）
右の方袋棚畫ハ枇杷。桃。柿。葡萄　益信筆　其下違棚　金貝中臺亭臺上
小襖あり天宸坐なり

○開山堂　方丈の東にあり　額　微笑庵　横額　宮江筆　開山の像を安す此所ハ別に作ツて巳の方に退く東に向　其東乃餅
行向に横わり碑の如くたけ板高サ五尺許亀趺あり立ちたれハ開山國師の
行状記を彫刻す其北高サ三尺段階四級欄干葱寶珠共に黒漆内
戸ハ張付唐織中に織の華鬘をかけたる内の中散あるサ三尺ばかり
小圖なる二枚とひらき御厨子六尺許

開山國師像　長三尺余倚子にかゝる法服袈裟飛紋の紙子を以て作る
像ハ國師の生前に作らせ給ふ頭面ハ國師の頭面を模して其面貌を模したりとかや
如し行道の人の作りしる東に在て自然の出現にして畫物と影あれ
毎朝手水を興へ又菓子鼻紙を供す

一休拜開山塔頌

荒草不鋤乃祖ノ玄　涅槃正法妙心ノ禅
杜鵑叫ト落開山ノ月　誰カ在ニ華園躑躅前ニ

○涅槃堂　同所東の方西向に　あり小堂内敷瓦　紫銅涅槃像　長三尺許像ハ倒にある画像の如し人面みな鍍金をかけたり
開山像は祖師の
牌を安す

○祥雲院殿魂舎　同所の西の方南面にあり　棄君像　長さ三尺余寸許白衣を着し船に乗る
棄君平生玩弄なし具之傳云棄君三歳の時伏見城中にて池の舩に乗て
舩を浮へて遊ひあひく終に墜溺して夢れなし是より祥雲院殿
玉巌麟公神童と号し秀吉公の御寵愛深く秀頼公の御舎兄へ
名を八幡太郎と称す御母ハ淀君備前守長政の女にして秀吉公
の妾たりし棄君を産し故に伊賀守となり傅として秀吉公五十
歳に逾たる年ひさしくちぢめて棄君を得られ寵愛ことに大方
ならす海内隣國の諸侯大名慶賀の筆を執て賀を献す棄君早世の時御菩提のため
東山の薬大佛殿の南今の智積院の地なり祥雲寺を営建し南化和尚を
請して開山とす秀吉公今の所に下して其蔵主に附けたり其蔵主となり
住職として南化入寂の後其蔵主に附けたり以て寺職して南化
織田常信の子にて秀吉公の門族なり以て入寺職して南化
の法子海南まで付し海南祥雲寺を嗣ぐて住持の

逆意あり妙心寺の南化演を起ツて海南に點擯し退去なさしむ
其蔵主も法嗣立がたくして遂に還俗し旅に足を洋し寺を離る
なかりしかば関東将軍家の厳命ありて禅宗を変じて
真言新義の本寺と再興ありて智積院と改む故に祥雲
院と妙心寺に移して棄君の
遺物妙心寺宝庫に蔵るなり

○風水泉 玉鳳院にあり名泉の一なり

○信長塔 ○信忠塔 ○武田信玄塔 ○同勝頼塔 信玄四男

○信勝塔 勝頼一男 ○信豊塔 信玄弟信繁の子左馬助と号す

妙心寺塔頭

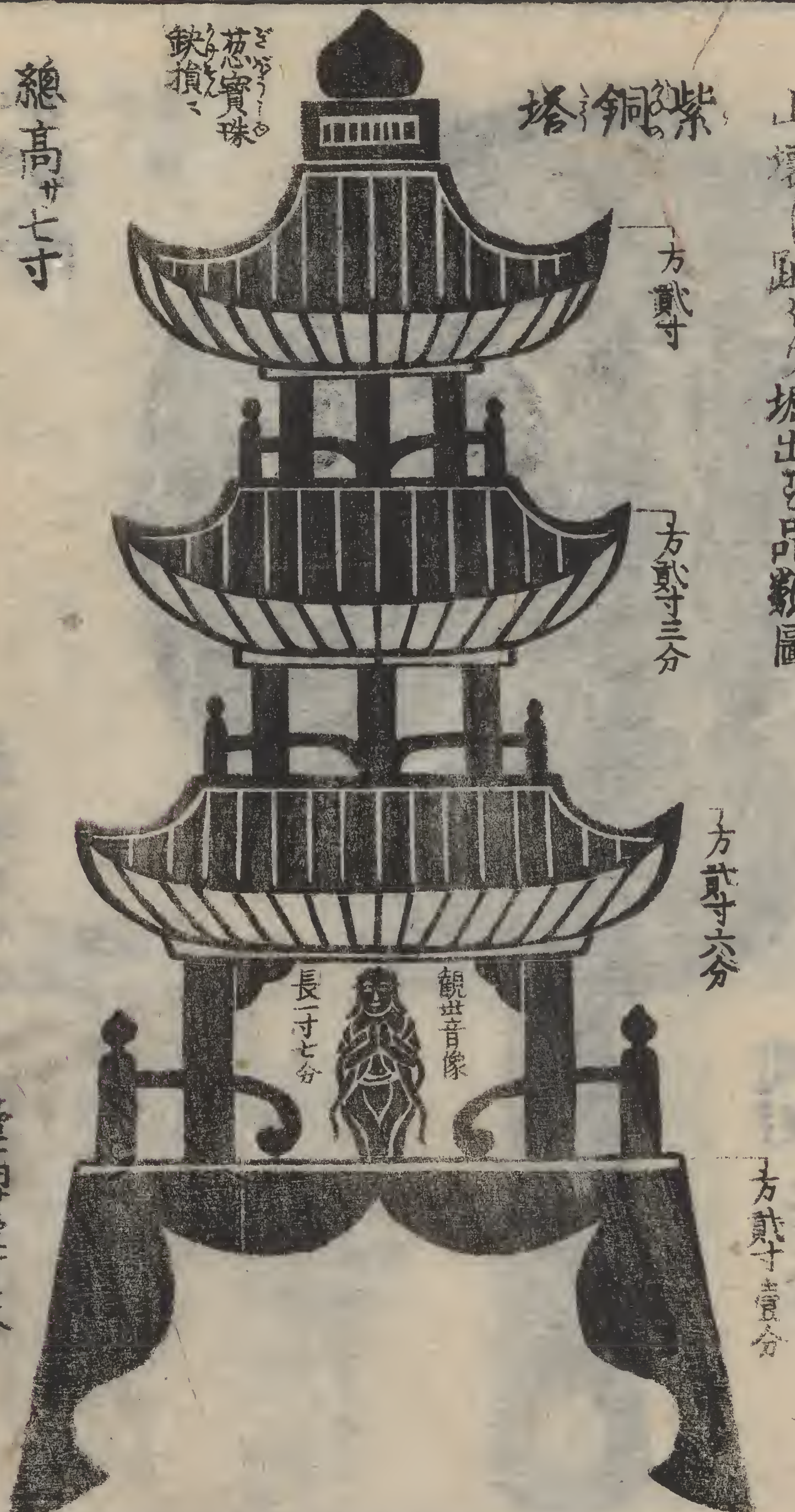
○天授院 妙心寺第二世授翁宗弼和尚の開基と伝へ云 此授翁和尚は俗姓万里小路中納言藤房卿なり建武二年
三月十一日後醍醐天皇に暇を乞ひて供奉し龍顔を拝して遁れさり
まゐらせ余所ながら遁世の道より侍士一人を具し
窃に忍びいりて北山岩倉にて薙髪し不二房といふ侍
を戒師として多年の儒冠を脱ぎて十禅林の法衣を持し乃身と
なる此の事太平記に詳なりそれより東西の国々へ行脚し
遂に都に帰りて俗姓を密し関山国師の法嗣として授翁
宗弼と号し妙心寺第二世となり老後は近江国に
隠棲し妙感寺とて禅の窓を開き
二年の秋 … 嘆して …
禅海 …

旅く遁世しけるを隠れ八十五 勅諡神光寂照禅師 今におゐて遠忌
ありひ八拝服忌日ありて万里小路家より使者ありとぞすべし藤房卿
の遺跡あまたありて妙感寺の什宝これ
東海道名所図会にも妙感寺出せり
抑藤房卿遁世しゆひて後諸国を経回して弐拾余年なりて南朝
正平十二年 北朝延文元年に当る 六十二歳の時妙心寺に入て関山国師に法を嗣て授翁
和尚と称す第二世となる然るに本朝遯史大日本史羅山子賛高泉
の禅林僧宝伝太平記ニ忠伝等に分明なるに独深艸元政の隠逸伝
にハまれを晩せり是按ずるに其頃南朝日を逐ふて微にして尊氏将軍
権を握て威勢ますます熾之に高傑の隠逸なれべ人まで都をまもん
事を厭く名を最も姿を変じて諸国を修行し洛西に来て
関山の法嗣と成て双岡の東なる池上の 今土人池亀村と云 杉菴に蟄して居
天授院を開基しすえに天授の文字ハ南朝第四代帝後亀山院 後醍醐天皇の
季の皇子之 諱熙成王 即位の年号なり 北朝永和元年に当る 開ては年号をとりて寺号とする例
多し又按ずるに授翁の授の字も其名を用ひ給ひなんや又授を院号

自縣に冠らせて南朝の君恩を報ぜられん名賢の験なるべし往々の
古哲深く考へ給ふ条なるべし去りながら　後西院の御時神光
寂照禅師の勅謚ありて其頃より顕れ出るべし　特に近年明和四
年の春下野国都賀郡西見野村長光寺境内より堀出せし宝
器あり　左に図で表して置く　愈波定次は宝器領主より　将軍家の
台覧に備へ　御紋の御櫃を賜ふ毎歳一度づつ其領主より捧げある
よしを命ぜられ給ふ然るに妙心寺の末院江戸牛込済松寺の吹挙に
よりて　官家へ申上げて今天授院に賜ひて霊宝とし給ふ当時凡百余
年の後までも忠賢を覆ひ徳を匿し給ふ事あれども隠逸のいさだ
よささるべし　龍逢比干が諌めに死し伯夷叔斉が首陽を踏居平
が漁父の辞もいまざしく忠臣名賢の清浄无塵空虚自性の
月のひかりなるに　其頃関山国師より外はあらはれざる事と歎
かれ侍り

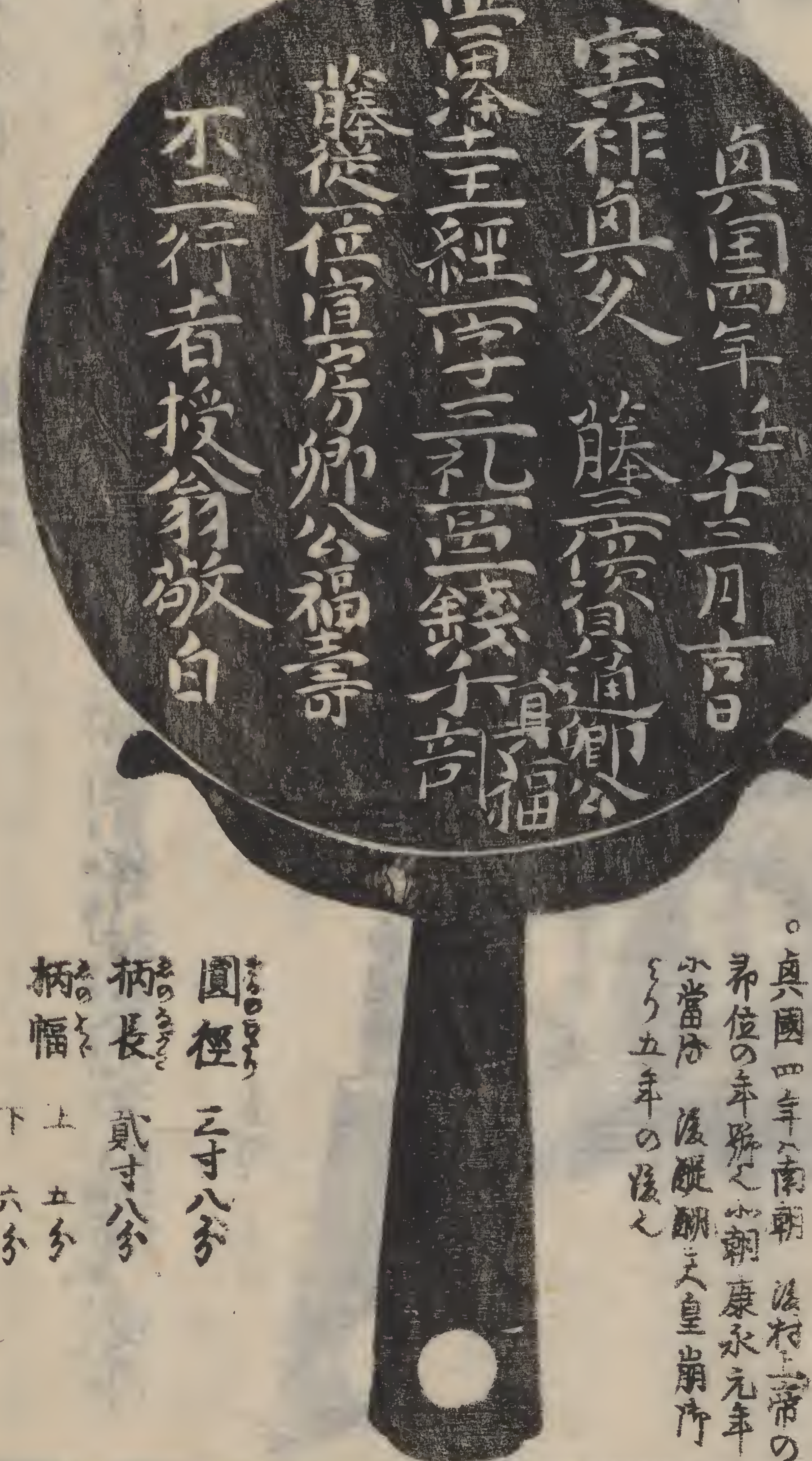
○天授院霊宝　藤房卿遺物四品之内

○明和四年丁亥正月廿八日下野国都賀郡西見野村長光寺（古済家宗後曹洞に）境内山壊し跡より堀出せる品類図



古鏡圖

表體



○系譜云大職冠鎌足六代閑院左大臣冬嗣公七男内舍人良門十二代

經房　暗定　經資　經爲　經

經俊　資通　宣房　万里小路藤房

季房　云云

○貞國四年ハ南朝　後村上帝の御位の年號也北朝康永元年ニ當る　後醍醐天皇崩御より五年の後也

圓徑　三寸八分

柄長　貳寸八分

柄幅　上　五分　下　六分

裏體



整衣冠尊瞻視　書言故事ニ出

整其衣冠尊其瞻視

朱晦菴敬齋箴之語

○紫銅塔　圖のごとく塔内に　正觀音一軀　○古鏡一面　圖のごとし　○古錢九百九拾壹文

但し塔内掘出したる後缺古錢十五文存在の錢九百七十六文各文字音分り塔内四百七十二文文字分明ならざる四十三文欠錢之四百六十文文字左の通

皇宋通宝　四十二文　　元祐通宝　八十文　　至元通宝　三文

至和通宝　五文　　煕寧元宝　四十九文　　元豊通宝　百十九文

右　塔ニ古錢ハ寫經一字三礼千部の數なりと云　繫さまおく紐つなぎ置けり

元符通宝拾六文	政和通宝拾五文	祥符元宝廿二文
嘉祐元宝五文	開元通宝四文	嘉祐通宝壹文
淳化元宝壹文	咸平元宝五文	皇宋元宝貳文
天聖元宝廿八文	大禧通宝十貳文	紹聖元宝十六文
大平通宝貳文	明道元宝貳文	治平元宝十五文
景德元宝九文	至道元宝貳文	治平通宝貳文
宋元通宝壹文	宣和通宝貳文	

文字不分明共ニ都合貳拾七品　右古錢在壺中ニ掘出之時壺破壊矣

○經文切　壺中ニあり　雲母紙ニ書寫の經文と相見ゆ　虫ばみ損じ残紙わづかに遺之

已上四箇品

万里小路藤房ハ幼よりおほくの書をもよみおぼえて上の御たすけをなさる
人なりしを、おしむべき十七の春上より今年のちしめれ祝詠はじめ
まうしつかへしに伝下されしに金玉のまどの常をも武ハ幽谷を尋しく人々
詩歌をばのこし置つくれしに藤房は詩作をもなされけり

春來品物都春容　木母花開香正濃
今日太平三朝且　家々酔賞更飛鍾
藤房

此詩をうかゞへ奏せられしに龍顔特にうるはしく[illegible]
よろしくはからひなむべしとて父の口へ伝下されけり

授翁和尚自賛　此像妙心寺塔頭天授院の蔵なり

朝遊夕處　威音王前　不立家國　坐斷大子
無因無果　白日青天　七凹八凸　佛祖不傳
宗猶上人　授翁叟書
于見麈軒

應安初元八月

授翁ハ應安元年ハ延文五年の翌る年なり　授翁和尚の入寂ハ関山国師より二十年に後醍醐天皇崩御より廿三年の後なり又関山国師遷化

贊印天澤東胤録云

徽猷勅書云　況又藤房者王佐才鳴於世間矣

元政枝案源遠傳云

藤房卿為僧嗣関山之法授翁宗弼是也　出家年歴不記

如常六祖傳云

藤房卿出家　四十二

已元延宝傳燈録

藤房卿出家　三十八

高泉枝案禅林僧宝傳云

藤房卿出家　三十八

藤房卿出家しゝ年を記し給ふ遠くさかのぼりて考ふるに建武二年の七月足利尊氏が反逆して[illegible]
不二房へ入りて剃髪しのちに建武二年七月左馬頭直義と鎌倉に護良親王を殺害し奉る[illegible]
直義伊賀守[illegible]
公の變をき延元元年五月楠正成が湊川にて討死[illegible]
たる變を早く察し出家したまひしかば、さらに考ふれば
よりあらかじめ建武二年より四十五年なり授翁の入寂の年
八十五歳の中なく四十五年を引きて
出家しゝ年四十歳なるべし


龍馬献上
建武二年の春出雲より塩冶判官高貞龍馬を
献上す其の馬出雲国
富田にて卯の刻に立て
酉の刻都に
来着す
道法
七十六里
奏しければ万里小路藤房卿は
同く異域の
例を引て
凶瑞のよしを
奏しければ
龍顔うるはしからざりけり
藤房卿
聖主崇権元弘年
有児産猫兎傳

○藤房卿髪塚 北岩倉大雲寺観音堂より登る石階の東二町許林の中に石塔一基あり高サ二尺余

傳聞ふ初め妙心寺に住せし樹下庵祖芳といふ僧あり此人彼卿の古墳を尋んとて北岩倉のほとりを逍遥するに小路の側に藤房の髪塚とて小さき標札あり荊林中に入りてこれを見るに荊棘おほひて墓所も蒼苔落かゝりし閑に文字をきざみしかども文字もなし其標札を建し人をも尋て便あるべしとそのあたりの人に問ふれど曾て知る人もなし依て祖芳師悲嘆のあまり憑んと思ひ一七日の歩を運びて観音へ祈誓し毎夜通夜せる毎に此古墳をも拝し念ずるに満る日法師の老人第カ一黒き羽織を着して出来り古塚と云ハかの事なり家孫勝之祖芳師に語りしに曰く早く立去り向ふて去る石塔ハ古き人の塚なりと云てかれ去れ万里小路藤房卿の髪塚なり此地ハ三百年の間蹟なり其ハ昔山岩倉實相院宮の候人上河原氏といふ人藤房の旧蹟といふ事御殿の舊記に誌されたり然るに今より二千年前暴風烈しき時此塔の下根の墓なる大木の松倒れて其時塔も倶に転びたるに台石より二寸計の石空虚にて其中に銅の筒長サ五寸直四寸許なるが出て筒中に髪毛ありけるとおぼしき也是故に髪塚と云ふ事旧記に符合して明白なれバ近年此標札を建置しと語られける祖芳師大に怡悦してあれ大悲の霊應なりとて拝謝し其この榛荊を払ひて遂に天授院より碑を建られける 此石塔山州名跡志にハ墟塚と号して墳を疾む者あれは祢まで忽ち祟ありと書り

碑表

万里小路中納言藤房卿髪塔

十二字

記百八十字

記曰

山城州北巖倉大雲教寺封境不二房舊址有一基石浮圖傳言藤房卿髪塔昔建武甲戌之冬藤房掛冠遁蹤岩倉禮於不二房法一薙髪自爾韜彩韜光居無定處此塔久歴星霜古貌巋然藏髪銅筒安塔之中央竊惟法一追感藤房寶德建之乎藤房東脩卤練後登洛西正法山受關山國師衣法遂為妙心禪寺第二世諱宗弼字授翁敕諡神光寂照禪師是也今恐荊榛荒涼不可識彫刻片石記其概畧以為後標

寛政二年庚戌三月廿八日

祖芳焚香謹識

石工 左京 今津庄三郎刻之

太平記云 藤房卿後醍醐帝に仕へて諫奏首に忤ふ事あれば竊に北山の岩倉に遁れて遂に
髪を剃して不二房と申す者を戒師とし 帝悔て父宣房をして尋させ給ふに宣房到て見るに空房のみ残りて行方なし

住捨る山を浮世の人とはゞあらしや庵の松ぞ答へん

弘和何年丹波国を去りし時とて藤房卿の真蹟は山城横田川の宝幢寺の什宝とせり 太平記の作者此和尚が跡を侍へて岩倉不二房に出しよし然れども剃髪して剃髪し其暁直に出去ありしが住所の事は五文字翻訳せりあるは後考をまつべし

若曲補考云 藤房卿は栗山に畑に帝を思ひ時能具まいらせて其後一条少将と倶りへ見えまいど

さても又浮世の人に此間それを知り給ふ事有とも見えてん

一条少将の跡をよく見さめいど年月と合せさくされば君の住富と云まれ

しるる後の事と藤の方より筑紫へ通りのまつらん折ふや其後絶て常吉

信も聞ざりし

○退蔵院 当山三世無因宗因和尚開基にて又日峯和尚中興にて初ノ波多野出雲守無因の為に建立し庵中に画聖古法眼元信の

此時藤房卿入足羽黒丸の城に出合藤房は干戈の難を止むる時なし藤房卿乱を避るにやおぼつかなし

作あり作に此真筆かりし

○春源院 当山第四世 日峯宗舜建立

○如是院 当山第五世 義天玄承建立

○衡梅院 当山第六世 雪江宗深建立 天秀方丈并堂次真野蔵人 判金五枚を喜捨して助之 此子孫駒田推古傳 仕ニ松平伊賀守殿ニ 当院の庵中ある者江松の事など日々より

右 微笑庵已下当山六祖と云ふ

△龍泉庵 景堂 創建 有塔

△東海庵 悟渓宗頓 創建

△霊雲院 特芳禅傑開基 当檀越石河掃部 建立

霊雲院は曾て取くも此あら庵は当庵襖の画みな古法眼乃筆なり今の後其戸を閉く揮後奈良院相國寺の是庵の此よりも傳ニ云此時古法眼の画猥に人の出入を許さずの所へ故に大休和尚退蔵ニ隠居之又云天和三年多く人の為に命て許さず此院五六十年の前とた三幅対嶽あり霊元帝古法眼の画取らる画を今拙物の眼の書院は通人龍安とい一緒せまりし作る山侍中の山水は子建まりし作る書院を写しく建所其後金森宗和此書院を摸しく加州の大守に奉る故に今に於て霊雲院と同形と云云



妙心塔頭
退蔵院（たいざうゐん）
此林泉は狩野古法眼作りしと云



真乗院（しんじょうかん）
芋喰僧都（いもくらひそうづ）
芋の名ハ
月にゆかりぬ
光かな
文暢
喰芋説法
播種法莚ニ
飢鉢盤中
顆々拾ヒ堆
脱離名利
弃堂沽却
出度摸芋魁
畑維龍
いもから
いちやこの世に
生れける
七十九歳 大江丸
狂詩
飛錫高僧好芋魁
沽鐘沽坊實銭
堆一瓶一鉢渾
縦芋水月入空
生芋臺
籬嶌
文鳴


妙心塔頭
春浦院
山林泉水虎渓を
縮むといふ什宝に
瀟湘といふ
名画あり世に
其名高し

○聖澤院 天蔭和尚創建東陽和尚と
勧請しく開基次

右四派祖

○大通院 開基ハ湘南和尚之此人ハ初メ土佐国守の息なりしく山水の勝景
を座中に造る事ば好みく奇石奇木を諸邦より聚め泉事
多し一衆書ば紀州禅林寺来山和尚に奉ト奇樹霊岩と號
来正法誌に見へたり座中の風趣当山第一なりしく二に称し
そのかし方丈の画ハ海北友松書院の襖猿廻しの図竹林
の雀舞ハ都く狩野探幽筆あらひハ王馬尚信か筆あり
当院の檀越ハ
松平土佐侯之

○蟠桃院 当院の林泉に奇石名岩多し客殿の画ハ花鳥茶花
又三国志墨画沈彩僕に狩野永徳の画あり玉澗
の中門ハ初メ聚楽館にありしく彫物名作之伝云左甚五郎が
彫刻となり当院ハ松平陸奥守殿檀越之

○雑華院 林泉ハ名庭なりしく奇石ば袈裟十六羅漢唯へ
釈尊大会の体樹ば枝に日蓮宗徒五郎乃作之
襖の画ハ花鳥なく
海北友松の筆之

○海福院 一宙和尚ば勧請しく開基とん檀越福島左衛門正則
書院の襖唐紙の上に探幽法印酒狂しく墨画にく
猿廻しの図を画く住持ハ是より帰寺しく之ハば見らんに辯しきさ
唐紙に描く墨画と書事不殺の至へと大に憤りく叱らるを
久く探幽法印ハ慙しく恥入る体之其幾力躁如に
画工の絶筆とも多く後世まで賞しく此寺の名物としく

又客殿の画ハ山水唐子遊百猫九四巻
あれみか狩野興意の筆なり

○桂春院 林泉妙境なり
檀越石河藏人

○大嶺院 林泉京師庸軒の作
檀越八丈宗左

○麟祥院 妙心寺門前の東花辻村にあり 寛永十一年建立
檀越稲葉丹後守侯
当院ハ稲葉春日局の菩提所なりしく御魂舎ハ後水尾院の御
殿をもて爰に移されしと云内の襖絵ハ狩野古右京の筆なり
方丈の釈迦仏と安次運慶の作之迦葉阿難ハ朝鮮人より献
ぜらるとえ阿難ハ新作額ハ朝鮮梅隠の筆内の襖の画ハ海北
友松書院の画ハ狩野探幽の筆之
△護天神祠 麟祥院鎮守なりしく境内の東にあり縁起云むかし正暦年中源頼信
勅を奉じて賊族を退治に出陣の時霊夢あり内裏の西の方葛籠
小路の辺に久しく天満神現じ頼信に告て宣く早く凶徒ば退
治に赴く我もしわれ陣頭に在て加護をなすべしと云終ッて失
遂に神勅に任せて出陣ありて一戦に凶徒ば残らず
滅しつの依之当社に天満神の社ば営造して霊験を頌し正
に邪当に補せられ永く護天神と称じ星霜を経ると
今ハ当院の鎮守となりて毎歳大般若経転読あり
時世人志ある事なれども霊験日々に新なりしく
むかしも今も
和光同塵なり

○春浦院 同所の南東街の西側にあり
檀那一柳土佐侯

当院方丈の画は都て蕭溪の筆也。又林泉は虎溪の三笑を象て妙景あり。其外の什宝に猫図と名づけし戯画の絶妙あり。妙筆にして画師評ずるに、往昔の土佐家の筆威を驚するばかり。依正の書れし放屁軍に似たり。殊しく上へ又ありて面白く、岸上に大笑ひを催す名画の時々、高貴方、雲客へも上覧に備へ世に名高し

○大光院　同所東側にあり　林泉妙境也

其外妙心寺境内塔頭都而八十餘寺あり。何れも高貴、諸侯の菩提所にして、林泉の風流あるひは名画名筆、記すに遑なし。故に予が大略見聞の縁をあくた著をのミ手略す

芋喰僧都旧跡

妙心寺小門外封境を所詳にせず。直乗院といふに在る、の末院あり。此院主盛親僧都とて、常に芋を多く食して仏道修行ありし事つまびらかに書ありといふ。いにしへ妙心寺の境内狭かりありし。花園法皇仙洞を建させ給ふ已前は、関山国師僅なる茶庵にて閑居しましまして、仏閣の屋根破れ漏りければ、雨日笠を被き坐禅し給ひたり。此時国師の故郷信州の人訪ひ来り、仏像を見て笑止におもひ、金を指出し、これにて草庵を修補したまへといふ。国師これを見て大に怒り、汝は何を施ふに非ず、居室の弊を修へ、只早く立去るべしと、金を共に外面へ投出されたり。此人投られながら言下に悟道して、国師の法を尊び深く賞して慇懃に礼拝し帰られたりとぞ

州云　直乗院に盛親僧都とてやんごとなき智者有けり。芋がしらといふものをこのみて多くくひけり。談義の座にても大きなる鉢にうづたかくもりて、ひざもとにおきつつくひながら文をもよみけり。わづらふ事あるには七日二七日など療治とてこもりゐて、思ふやうによき芋がしらをえらびてことに多く食て、よろづの病をいやしけり。人にくはする事なし。只ひとりのみぞくひける。きはめてまづしかりけるに、師匠死ざまに銭二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫に売て、かれこれ三万疋を芋がしらの銭とさだめて、京なる人にあづけおきて、十貫づつとりよせて芋がしらをとぼしからずめしけるほどに、又こと用にもちゐる事なくて、其銭みなに成にけり。三百貫の物をまづしき身にまうけてかくはからひける、誠にありがたき道心者なりとぞ人申しける。此僧都或法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。とは何物ぞと人のとひければ、さる物を我もしらず、もしあらましかば此僧のかほに似てんとぞいひける。此僧都みめよく力つよく大食にて、能書学匠弁説人にすぐれて、宗の法灯なれば寺中にもおもく思はれたりけれども、世をかろく思ひたる曲者にて、万自由にして大かた人にしたがふといふことなし。出仕して饗膳などにつく時も皆人の前すゑわたさ

とかくまで及ハゞおふさへめれだやがてひとゝまうちうちひて物うたがれバ
ひやうり津へさちてゆきさん人も非附も人ふひとうしく定てくだけつさひ
されバ敎からにも曉ふもそひく祥ひてられハ足もうけこりてハゞある
大事あれども人のいふ事きていれど目覺あれハ敎もいはんとを痛
してうなきたありさかとよの津○有ぬさ痛あれど人事なそうれあ
と後洲ゆるされたり德のあそれつてきるにや

大應國師塔 妙心寺の東五町許安井村竹林の中にあり北地原と國師の開基龍翔寺の舊蹟之寺ハ應仁の兵火にかゝり近年
龍翔寺の文字れ古惡を堀出し次今る紫野大德寺塔頭の中
に寺號を移しく再興に及ふ則大德寺の開山大燈國師の
師え入宋しく虛堂和尚に法嗣を
本朝達磨宗の大德あり

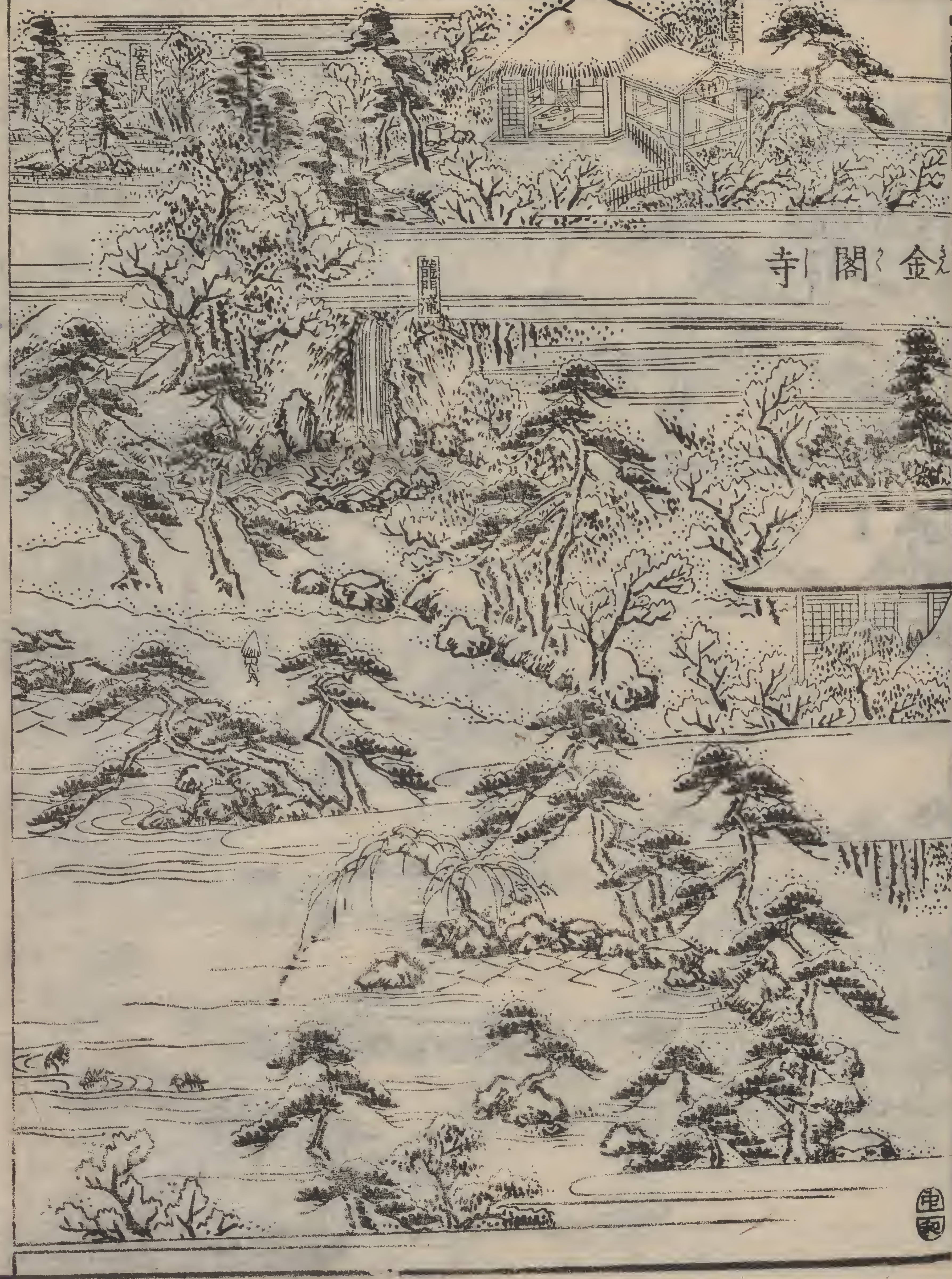
傳云大應國師諱ハ紹明字ハ南浦駿州安部郡の巨族藤氏の子之
幼しく駿州建穗寺淨辨に事く法の出世於學び年十五にして
しく薙髮し具足戒於受鎌倉建長寺蘭溪隆和尚に參
禪し正元の頃宋國に入く偏く諸山を訪ふ時に虛堂和尚
淨慈に投ず時道風高峻學者敢く其門に登ゆ事なし南浦
參謁しく機鋒相契ふ虛堂大ひに歡んく賓客に典しむ
日夕咨扣ふ一日虛堂の頂相を換しく讚於請ふ虛堂
書しく曰

紹既明白 語不失宗 手頭攔弄
金圏栗蓬 大唐國裏 無人會

文永八年太宰府崇福寺に止錫ある事二十三年參徒日々に熾之
嘉元の間詔於奉じて京師に入 太上皇 後宇多帝 召して宮掖に對し
問答叡慮に稱ひ勅を下しく萬壽禪寺を主とらしむ延慶元年
臘月廿九日忽微痒あり衆に頌を書しく曰

訶風罵雨 佛祖不知。
一機瞥轉 閃電猶遲

書し畢て加趺しく逝去 世壽七十四歲 上皇哀慕して已於勅しく圓通
大應國師と謚ある寺を右京に營く額しく龍翔と號し塔を後山
に築く普光といふ



一休和尚年譜云

寛正二年ノ春遊ニ嵯峨ニ路経ニ西京ニ入テ拝ス龍翔ノ之塔ヲ荒涼タル僧堂宇頽歎昭堂ハ特ニ龍山ノ誉テ而獨無シ恙庫院最モ廢ス

狂雲集　感龍翔廢寺ヲ

常住物誰カ用ン己身山門ノ境致剪ル松蔦
殿堂ハ只與ル花零落ス廢地ノ秋風二月ノ春

後宇多院塔 大應國師塔の左に双ぶ御髪を藏むといふ

賀陽門院塔 安井村龍翔寺古跡竹林の中にあり五輪石塔なり是は此門院ハ後鳥羽院皇女齋院准后御母ハ内大臣信清の女也龍翔ち境内ハ初メ賀陽門院の御跡也荒廢の後大應國師の徒此地に移く國師の塔跡とす

鹿苑寺 北山の中にあり世に金閣寺といふ原ハ西園寺家の舊蹟也足利三代義満公入道の別業となる遺命によりて寺とし夢窓國師を開基とす應永年中時に天下第一に稱せし也林泉記及び北山林泉に三重の金閣あり各層盤に鳳凰を立上を究竟頂中に潮音洞下を法水院といふ総て金箔をもつて押故に金閣の名あり池を鏡湖といふ九山八海石あり御茶の水を銀河の泉といふ龍門瀑に鯉魚石あり安民澤に外龍石あり明王院に石鎚の不動を安置す又石の獨鈷水あり名に聞ゆる所を鎮守とす実に此閣ハ和漢宣帝の営みし麒麟閣にも比せんや


衣笠山
畠山石
赤松石
鏡湖池


其二
銀河泉
岩下水
龜嶋
九山八海石

○足利三代将軍義満公ハ延文三年八月廿二日京都ニ誕生し幼名を春王といふ応安元年十二月征夷大将軍の宣下あり永和四年室町に花亭を移て室町殿と号す館に名花数千株を樹る時の人花の御所とよぶ同十二月従二位ニ叙す同二年に従一位に叙し御直衣初あり永徳二年正月左大臣ニ任す同年将軍家紀州和歌の浦に遊び又富士山ニ赴く応永元年将軍を長子義持ニ譲り義満公太政大臣に任じ兵仗宣下あり（世に伝ふ義満相国に任せんとおもひ朝廷にねがふ許されず故に義満公家の領地を押領し義満自国王となりて細川を摂家とし畠山を清花としてく朝廷を廃せんとたくみありしかば朝廷大に驚き大相国を勅許に）応永五年六月鹿苑院に三重高閣を営む同六年相国寺ニ七重大塔を建る金閣ハ退居より小山殿と称ス明皇道書を贈て黄金二千両を寄る書ハ参議菅原秀長草す応永十五年五月六日前征夷大将軍太政大臣従一位准三宮義満公北山亭にて薨す 年齢五十一 鹿苑院殿と号す 勅使来吊 太上天皇の号を贈らる嫡子義持古主固辞す大明帝より祭文を作て恭献王と賞す